

市民の意見

発行：市民の意見30の会・東京

NO.126

2011/6/1

【毎月1日発行】



発行者の住所：〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-29-12-305 TEL:03-3423-0185 FAX:03-3402-3218
 郵便振替：00120-9-359506 eメール：iken30@mwb.biglobe.ne.jp ホームページ：http://www.1.jca.apc.org/iken30
 * 隔月刊/購読料・送料とも年2500円、一部400円、65歳以上および身障者の方は年2000円 グリーン会員の方は年1000円



大貝 彌太郎「飛行兵立像」
 (無言館所蔵 作者の経歴は3ページ)

りっぱな特攻隊飛行士だ。皇国日本のために、思いのこすことなく敵中に散れ。

大貝は鉛筆を動かしながら

あふれる思いをこらえられなかった。

それほど少年兵の顔はりくしく、美しかった。

出来得るなら、

この勇姿が最後の絵とならぬことを大貝は祈った。

しかし、この少年が生きて還ることは

ありえないのだ。

大貝は少年兵を一心に描きながら、

この子を生み育てた親兄弟のことを思った。

自らも肺を思い、

二年後に他界した大貝にとって、

この「飛行兵立像」は大貝自身の自画像でもあったといつてもいいかもしれない。

(窪島誠一郎「無言館 戦没画学生「祈りの絵」」講談社刊より)

市民の意見 126号 目次

● 巻頭詩 「夏を送る夜に」 鈴木文子 2

● 特集 福島第一原発人災事故 体制知の崩壊が始まった 山口幸夫 4

放射能は人を差別する 山口素明 7

福島原発60km地点から 黒田節子 8

ドイツから見る福島原発事故 梶川ゆう 10

祝島・自然エネルギー100%社会 山戸 孝 12

福島原発情報共同デスクの発足 大野和興 14

声明「惨事を市民のコントロールのもとに」 15

6・11 脱原発100万人アクションの呼びかけ 16

パレスチナの登場・中東情勢のその後 高橋武智 18

メア発言が伝える日米の認識と真実 海老坂武 20

■ ジブチ自衛隊基地建设 F・レイマリ 22

● 文化

連載エッセイ⑤ キャンセルという視察点 鈴木一誌 25

反戦交友録⑥ 小田実、高木仁三郎さん 吉川勇一 26

映画の紹介 「黄色い星の子供たち」 本野義雄 28

本の紹介

「一九六〇年代未来へつづく思想」 石田 雄 29

3冊の1968年論 天野恵一 30

マンガ ふしぎの国のありか③ まつただたえこ 34

● 情報

事務局だより 高橋武智 35

意見広告運動の報告 橋本保彦 27

読者懇談会の報告 読者のおたより 31

インフォメーション 34 会計報告・編集後記 36

◆ カット 村雲 司 ◆ 題字 安西賢誠

☆ 6月の読者懇談会は都合により中止いたします。ご了承ください。

夏を送る夜に

—原発ジプシー逝く—

鈴木 文子

いいやつだったなあ。
ああ、いいやつだった。
それにしてものんべえだったなあ。
のむしかなかったのよ。

百姓やめて何年んなる。

田畑たはたくさぼうぼうんなって五年よ。

漁に出なくなつて三年半。

不漁つづきで、借金かかえて、

どうにもなんなかつた。

そんな時、

請負いの親方がきたつてわけさ。

十分か二十分働いて、

たった三分で一日の手間もらつたこともある。

命がけで魚とつてたもんにとつちやあ、

原発さまさまだつた。

百姓だつておんなじよ。

なんにも知らねで、

ゴムのカッパ着て、長グツはいて、

宇宙人みてなマスクつけて、

マスクは苦しいからはずして仕事した、

いつだったか、

炬の床にこぼれた水ふきとつてたら、

胸こ下ぎたアラム・メーターが、



サヨナラ。

ひび割れた炬ん中で、

一〇〇〇ミリレムもあびたつて話だが、

無事に国へ帰れたろうか——。

若くて肌が光っていたから、

毒なんかしみなかつただろうよ。

きつと、そうしみなかつた。

■ 詩の作者 ■

すずき・ふみこ、1942年千葉県生れ。詩集『鈴木文子詩集』『電車道』。詩誌「炎樹」、詩人会議所属。千葉県我孫子市に暮らす

ヒーヒー呼んでくるセネの老んの
そんなの無視して作業やったけんどな。

そらあそうだ。

メーターがパンクしたって

やめられるもんじゃねえ。

上のせ手当ほしかったもんな。

あしたつから仕事もらえなくなったら。

そのことばっかり考えて。

仕事終ると。

一二〇ミリレムって。

被爆基準どおりに書いたもんだ。

二〇〇ミリレムこえると、

メーターの針が切れるそうだ。

放射能は、

見えるわけじゃなし 臭くもなし。

仕事してつとき、

どこかが痛くなることもなし、

恐ろしいなんて信じられねえんだな。

覚えているかい あの黒人のこと。

でっかい体で真っ白い歯で。

コニチワ。

日本語はコニチワとサヨナラだけで。

体でリズムとりながらペラペラしゃべって、

人なつこい気のおよさそうな青年だった。

両手をいっぱいひろげて、

首をちょこんと曲げて、

いやつだったなあ。
ああ。

もうすぐおれたちも。

まあ 一パイいこうか。

ああ………

(『鎮魂詩四〇四人集』(2010年8月榊コーサルック社刊)より転載。)

▼ 表紙絵の作者 ▲



大貝 彌太郎

(おおが い・やたろう)

1908(明治41)年、福岡県遠賀郡に生まれる。
1927(昭和2)年東京美術学校師範科に入学。藤島
武二教室に学び、同期の小川原脩らと「緑人会」を結成。
1935(昭和10)年に卒業。1939(昭和14)年温子と結
婚、3児をもうける。1944(昭和19)年長崎地方航空
機乗員養成所教諭となり、2点の特攻隊飛行士の絵をのこ
す。1945(昭和20)年、肺浸潤を病んで入院、1946(昭
和21)年結核のために死去。享年38歳。

福島第一原発人災事故

体制知の崩壊が始まった

山口 幸夫



2011年3月11日に福島で起こって以来、

今に続いているこのありさまを事故と呼ぶのはふさわしくない。いつになれば収束するのか誰にもわからない。不可逆的な、とりかえしがつかない変化が進行している。スリーマイル、チェルノブイリに続き、そしてまた、ヒロシマ、ナガサキに続く放射能・放射線の災厄である。過去60年がもたらした必然の結果と言うべきである。体制を支えてきた知の構造そのものが溶け崩れ始めたのではないかと思う。

核エネルギーは制御可能ではなかった

まぎれもなく、原子力の〈平和利用〉が唱えられたときからの長年の疑問に、終止符が打たれた。制御可能だと信じ込んできた人たち、あるいは、敢えてその判断を選択した人たちに、いつさいの弁明はゆるされなくなっ

た。

核爆弾の場合、核分裂の連鎖反応をごく短時間におこなわせてしまえば、それでおしまいだ。後始末は要らない。だが、核エネルギーの〈平和利用〉とされてきた原子力発電においては、絶対に必要な3つの条件がある。ひとつくちに「止める・冷やす・閉じ込める」と言う。マグニチュード9.0の東北地方太平洋沖地震とそれに伴った巨大津波とによって、この絶対必要条件が成り立たない実例が眼前に繰り広げられている。

福島第一原発から放出された放射性物質は大気と大地と海を汚染した。汚染はいまも進行している。すでに、原発近くの人々に急性放射線障害が顕れた。人々は住み慣れた父祖の地を去らねばならず、ふたたび戻ることはできないだろう。21世紀の〈高度科学技術化社会〉という、誇らしげな文明のなかの流浪

の民とならざるをえなくなった。

放射性物質は、東北・関東にとどまらず、日本の各地へ、北米、ヨーロッパ、南半球にも拡散した。いまだ、終わっていない。地球全体がフクシマからの放射性物質で汚染されつつある。

原発では、核分裂の進行を制御して一定の速さにおさめ、必要に応じて、「止める」ことができないなければならない。核分裂をおこなわせるのは中性子だが、いざというときにはその中性子を吸収する制御棒を挿入して、核分裂を止めねばならない。3月11日の地震の揺れを感じて福島原発の原子炉の制御棒は自動的に挿入され、「止める」ことには成功したようである。

「冷やす・閉じ込める」に失敗

薪や炭を燃やすとき、水をかければ火を消すことはできる。しかし、核分裂の場合、簡単ではない。崩壊熱があるからだ。

核分裂で原子炉の中にできた物質には放射能（原子が放射線を出しておのずと壊れる性質、または、現象のこと）を持つものがある。これらには、それぞれ固有の半減期があり、放射線を出しながら崩壊してゆくが、このときに熱を発生する。これが崩壊熱である。核分裂を止めても、崩壊熱は出続ける。この熱は取り去らなければならない。さもないと、原子炉の中に熱が溜まり炉水を蒸発させ、炉水の水位が下がって燃料棒が水中から顔を出してく

ると、燃料の被覆管と水蒸気とが反応して炉内に水素が発生する。これは発熱反応なので、燃料はさらに高温になり、溶融するおそれが生じる。いつぼう、水蒸気と水素とで炉内の圧力が上がる。炉が破壊するおそれがでてくる。そういう万一の場合に備えて、圧力逃がし弁というものが設置してはある。どうしても「冷やし」続けなければならぬ理由はここにある。原発で核燃料を燃やして（核分裂させて）得られるエネルギーのことを「天上の火」と呼ぶのは、いったん燃やし始めたら消すことが出来ないことがあるからである。

福島第一原発の1号炉から4号炉まで、燃料を「冷やす」ことに失敗した。非常に困ったことには、いつになれば冷えた状態（冷温）が実現できるのか見通しが立たないことだ。放射能を「閉じ込める」こともできなかつた。原子力を進めてきた人たちは、「五重の壁」があるから原発は絶対に安全だと言いつつってきた。福島第一原発では、その「五重の壁」が破れたのであり、安全神話は潰えた。

「五重の壁」とは、まず、燃料のウランが二酸化ウランという酸化物として焼き固められベレットにしてあること、2番目にこのベレットはジルコニウム合金製の被覆管の中に入っていること、3番目に被覆管は原子炉圧力容器の中に入っていること、4番目に圧力容器は原子炉格納容器に収められていること、最後に、原子炉建屋の中にこれら全部が入っていること。これが「五重の壁」である。

起ったこと

福島第一原発で、何が、どのように起こったのか、未ださだかではない。温度、原子炉内の水位、圧力などの基礎データがどれだけ確かなものか判らないからである。公表されたデータはしばしば訂正、否定されるからだ。しかし、およそのことは推察できそうである。かいつまんで述べる。（これを書き上げたところに、1号炉に水がほとんど入ってなかったというニュースが流れた）

破局は1号機から始まったらしい。それは運転開始から40年になる老朽原発である。たぶん、津波の影響を受ける前に、地震の揺れによって原子炉の配管系にキズ、割れが生じた。原子炉から水が漏れ出し、水位が下がった。そのために、燃料被覆管が水面上に顔を出し、水素が発生した。これが建屋内に漏れ出て、水素爆発が起こった。燃料の溶融も始

まった。原子炉圧力容器にも相当な損傷が生じた疑いがある。外から水を注入しても、原子炉の水位が上がらないようだが、途中の配管系がダメになっているのか、弁などが正しく機能していないのか。

1号機と3号機とで、建屋が水素爆発で吹き飛んだ。2号機は圧力抑制室の付近で大きく破損し、建屋の下部に穴があいてしまった。水素爆発によるのか地震による揺れのせいかわからない。4号機は原子炉の中には燃料が入っていないかったが、使用済み燃料を貯蔵しているプールの天井が水素爆発で吹き飛んで、使用済み燃料プールは雨ざらしになった。このプールを定期的に冷却する機能が失われた。これら一連の水素爆発で、燃料内にできていた放射性のヨウ素やセシウムなどが大量に放出され、風に乗って広範囲に撒き散らされた。大爆発を防ぐために、ベント（故意に放射性物質を排気する）が繰り返し返され、恒常的な放射能が続いている。大気中の放射線量は異常に高い値を示し、地面に降って畑や野菜類、茶の葉などに従来の基準値を超える汚染が続出した。そしてまた、原子炉を冷やすために注入された水に放射性物質が混入し、高レベルの放射能水が海へ出ていった。それは今も続いている。

経験に学ばず、批判を封じてきた原子力のシステム

今日の事態をひきおこした責任の第一は、



新宿西口反戦意思表示より（写真提供は以下P.9まで大木晴子）



政・官・財・学からなる強固な「原子カムラ」にある。さらに、裁判官とジャーナリズムにもおおいに責任がある。

スリーマイル島事故（1979年）、

チェルノブイリ事故（1986年）と続いたあと、次は日本で大事故が起きるのではないかと、原発批判派は危惧した。だが、「原子カムラ」の人たちは、原子炉のタイプが違う、日本は進んだ技術力がある、と胸を張った。原発差止め裁判では、裁判長は「原子カムラ」住人の言う絶対安全説を採用し、原告たちは連敗に連敗を重ねた。ジャーナリズムは、タレントや芸能人・著名人を使って、提灯もちを続けた。

2002年夏、東京電力の原発トラブル隠しが発覚した。しかしその後、東電のみならず、すべての電力会社の原発に関してのデータ隠しは一向に改まらなかつた。現実には、データを隠したり、改ざんしたり、沈黙したりしないと、原発は運転できないような巨大で複雑なシステムなのである。利害を共有する「原子カムラ」が続くかぎり、原発をさまざまな角度から検討することは不可能に見えた。

ところがこの間、ひとつの変化が生じてい

た。

2007年夏、新潟県中越沖地震が起き、東電所有の世界最大規模の柏崎刈羽原発の7基全部が運転できなくなった。ここは1箇所820万キロワットの発電容量を持つ。地震そのものはマグニチュード6.8の中規模の地震だったが、耐震設計の数倍という大きな揺れが原発を襲った。再開はとうてい無理と思われたのに、東電は国際原子力機関（IAEA）を巻き込んで、再開へ向けて動き出した。新潟県は原発反対の住民運動からの要請を聞き入れて、複数の批判派学者が参加する県の検討委員会を発足させた。すでに3年間の審議が重ねられていた。この場では、東電の言い分は鋭い批判にさらされ、そのままでは通らない。東電は批判意見を取り入れ、調査・点検・計算や実験をやり直し、健全性と耐震安全性を認めてもらわないといけなくなつた。それを受けて、御用学者で構成されている国の審議会も審議の修正を余儀なくされることになった。「原子カムラ」の一角に風穴があきかけていたわけである。

浜岡原発運転中断の意味

原発震災は福島で起きてしまったが、浜岡原発ではこのことがずっと懸念されていた。住民が2002年に静岡地裁に提訴した浜岡原発運転差止め裁判は、5年の審理を経て、2007年10月、原告敗訴に終わった。現在は東京高等裁判所で争われている。

静岡地裁では、原告側証人の地震学者の石橋克彦氏、元原子炉設計技術者の田中三彦氏、金属材料研究者の井野博満氏の十二分な証言によって、誰の目にも、運転停止判決が下されるだろうと思われた。しかし、中部電力側の証人に立った班目春樹東大教授（現、原子力安全委員会委員長）は、「全体として大きな安全余裕があります」と証言した。裁判長はこれを採用したのであった。

班目氏は、新潟県中越沖地震後、国の調査・対策委員長を務めているが、柏崎刈羽原発には十分な余裕があると明言し、2007年秋の原子力学会では、設計余裕が30倍もあると講演した。それは、新潟県の委員会ですら事実上否定された。3月12日朝、菅首相に付き添ってヘリコプターで現地視察した班目原子力安全委員長は、水素爆発は起きません、と首相に助言したと報道された。

この5月6日、菅首相は中部電力にすでに廃炉が決まっている1、2号機のほかの3機の停止を求めた。中部電力は、定期点検中の3号機を含め、4、5号機も近日中に停止することを決めた。

こう見てくると、「原子カムラ」が壊れ始めており、福島原発の厳正な総括がなされた後、紆余曲折はあるとも、日本の原発は終わっていく以外にはないだろう。

（やまぐち・ゆきお、認定NPO法人原子力資料情報室・共同代表、5月12日記）

放射能は人を差別する

山口 素明

不明な復旧現場の実態

「まず何よりもいま、福島原発で取り組まれたつつ隠されている労働のすべてを子細に公開すべきだ。たとえば冷却水注入作業のために、誰がどこをどのように走り、管をつなぎ、バルブを開けたのか。放射能に汚染された飛沫を誰がふき取り、ふき取ることを誰が命じているのか。これは英雄譚を作り出すためではなく、そこで働く人々をグスコブドリ(編注:宮沢賢治童話の主人公)にして褒め称える醜悪さを私たちが克服するための要求だ。『数千万の命を救う』ために自らは決してしない仕事を、原発労働者に求めるおぞましいまでの冷酷さから私たちが遠ざからなければならぬ。死を強制される労働の拒否こそ私たちが支えるべきである。』(グスコブドリのいないイーハトーヴは「ぐんざ」http://dhatena.ne.jp/spiders_nest/20110317/1300289557/)

死への労働

3月17日、仲間と議論し私たちは日本政府と東京電力に以下を要求した。3日前の3号機爆発による大量の放射性物質の放出を受け、経産省と厚労省は福島第一原発での作業員の

被曝線量上限をこれまでの1000mSvから250mSvに引き上げていた。東京電力社員と家族の美談、自衛隊や消防の決死の活躍がマスメディアを覆い尽くしていることを「好機」とし、自衛隊、消防庁ハイパーレスキュー隊、東電社員を「グスコブドリ」と位置づけることで、「死への労働」の称揚と制度強化がほとんどなんの議論もなくなされたのである。現在も福島原発の事故は収束への道筋も見えないが、事故の処理と瓦礫の片付けなどで、数万人の人々が労働者としての被曝を余儀なくされていくことだろう。

被曝への関心は、事故によって急速に高まった。しかし、原子力発電での被曝は事故がもたらすものではない。原子力発電は一定の人々に深刻な健康被害を与えずには稼働しない仕組みだからである。ウランの採掘地から「最終処分」場まで、これまでも日常的に、そしていまも原発に関わるすべての場で、たとえ福島第一原発の事故がなくとも被曝労働は続いている。

被曝労働を許すな

2006年に亡くなった長尾光明さんのことを記しておこうと思う。長尾さんは石川島

プラント建設で雇用され、1977年から4年余にわたり福島第一原発で働いたベテランの配管工である。東京電力が東芝に出し、東芝が石川島プラントに出した仕事。重層的な下請け構造の中で、東京電力が言うところのいわゆる「協力会社」で、長尾さんは累積で70mSvに及ぶ放射線を浴びた。そして退職後、1998年に多発性骨髄腫の診断を受けた。その長尾さんが労災認定を受けるまでに6年を要している。

またその後、原子力損害賠償法に基づき起こした訴訟では、被告・東京電力は長尾さんの被曝と発症の因果関係を否定し、あるうことか長尾さんの病名すら争うことで3年にわたって訴訟を引き延ばし続けた。そのため長尾さんは判決を聞くことなく鬼籍に入った。このことを私たちは何より深く記憶しようと思う。いま、厚労省は福島第一以外の原発労働に従事する作業員についても、年間被曝線量の上限である50mSvの撤廃すら狙っている。

勤務地は「福島県双葉郡楢葉町 福島県双葉郡大熊町」。仕事内容は「原子力発電所内の定期検査・機械・電気・鍛冶溶接及び足場作



業」。日給9千円から1万1千円で4カ月以上の有期契約。月に21日稼働20万円ほどになる。事故の直前、2月3日から福島県の「ハローワーク相双」に掲載された求人である。

福島原発60km地点から

黒田 節子



ショックは、見ているのも辛いものだった。いったい、なんでこのようなことに。

「親愛なる皆さんへ 最大・最良の行動は、今、原発からなるべく離れることだと思います。私たちは、緊急に会津に逃げます。友人も南へ、西へ逃げています。電話が不通です。メール可能が多い。間もなく移動します。P.Cはいつもひらくことはできなくなります。携帯アドは〇〇です。共に生きましょう！道を開きましょう！」

こんなメールを日頃世話になっている方々誰彼となく送ったのは、3月13日の朝8時過ぎ。大地震からおおよそ40時間。その後の15日（火）が最も高い放射線値を出しているから、福島第一原発では危機的な状況に刻々と陥り始めていた頃だ。高崎に避難先を変えて10日ほど。このときに群馬県でもハウレンソウとカキ菜に出荷規制が出て、有機農業で安全な土造りに汗流して頑張っている妹夫婦の

放射能はひとしく降り注ぎはしない。放射能は人を差別する。それは不安定貧民にこそ降り注ぐ。

（やまぐち・もとあき、フリーター全労働組合）

シヨックは、見ているのも辛いものだった。いったい、なんでこのようなことに。平常値（0・05μS/h）からすれば、ほぼ2ケタ高い郡山だ。今後どうするか迷いながらも、仕事のこともありいったん帰宅。放射能には色がない、臭いがない。久しぶりのご近所さんと立ち話して、その情報格差に危機感の格差に愕然とするものの、水道は復旧、食料もガソリンも出回りつつあり、一見、街は平穏を取り戻したかのようだった。

突然の解雇通知

3月29日、職場の長から「雇用期間満了」ということで解雇通知を受ける。「満了期限」3日前のことである。子どもの人数把握に時間がかかるという理由で例年わずか1週間前ぐらいに臨時職員の移動発表があるのだが、今年はさらにそれが短くなっている。解雇も多いようだ。4月7日、市長宛の申し入れ書を市役所職員課長に。要旨は4点だ。①これ

は解雇であり、不当解雇は許されない。②解雇理由を説明しなさい。③解雇予告手当を出しなさい。④地震での自宅待機分を補償しなさい。（5月2日現在、回答はまだ出ていない）

市立保育所の保育士は、正規の職員が約200名、臨時職員が約150名。臨時なくして運営は一日も成り立たない、にもかかわらず、その身分は非常に不安定・劣悪な待遇だ。様々な面で我慢を強いられている臨時職員だが、災害後の非常事態ともいえる今こそ、自治体当局は労働基準法および労働契約法を地域に率先して遵守し、弱いものがさらに痛めつけられている事態を回避しなくちゃいけないだろう。

日々が干上がっても困るので、ともかくハローワークに行く。噂には聞いていたものの、すごい人、人。原発被災者が多く（会話内容で分かる）、待ち時間に親子連れ（母・娘）と話をしようになるが「支援金・貸付金？雇用保険の特例措置？そんなんがあるの」と行政情報も全く伝わっていない。慣れない町での職安通いだ。他にも何かできることが





あれは、電話番号をメモして手渡しす。

母親は、本当にたくさん感情が次から次へと溢れ出て、途中から泣きながらの会話となった。「東電に全く部補償させるようにすっから!」「原発はもうごめんだない」とか励ましながら、私もまたもらい泣き。当然ですが、今、原発立地町村の人たちが最も原発を忌み嫌い、否定しまくっている。東電や国に裏切られた、という強い思いもあるだろう。彼女の悲嘆と怒り、これを外れての脱原発運動はないことを忘れたくはない。

情報操作と進まない退避

5月5日現在の郡山の放射線値は1.6μSv/h前後。福島県内の学校の75%が放射能「管理区域」レベルの汚染、20%が「個別被ばく管理」が必要なレベルの汚染状況にある。子どもたちを全員「放射線管理責任者」にして、原発内で遊ばせているようなものだ。「子どもと妊産婦をまず早急に退避させるべき」「一般人の年間許容量を20mSvから1mSvに戻して」と私たちは声をあげ続けている。ところが・・・最近では、全国の自治体レベ

ルでも受け入れ体制が相当できてきているのに、実際に避難する人が少ないということが見えてきた。この数日間、私が関わっているものだけでも団体の方々が、2回にわたって情報を持って来られている。仏教・キリスト教・各宗派を越えて協力し合い、数百人単位で受け入れましょう、というものだ。会は活発に動き始めた。また、傾聴ボランティアで出会った○○さんは、良さそうな家の写真など具体的な情報をはるばる福岡から持って来て下さった。が、しかし、いつ避難所に行っても彼女が貼った写真はそのままなのだ。

きっと今必要なのは、情報を具体的につなげる人。コデーネイト役ではないかと、多くの人が感じ始めている。それは多分、情報を手にフェイスブックで رفتたり来たりし、両者の調整を図るという役目だろうか。もちろん、全ての負担を補償しなければ被災者は動けない。

巧みな、またはあからさまな情報操作で、多くの人が不安を抱えつつも「このままでいいか」と思ってしまったこともある。先日、山下俊一教授の講演を聞きに行った。「年間1000mSv以下のレベルであれば、健康にまったく影響をおよぼさない」、福島の人には「大丈夫だから」ゆつくり病気になるに死になさいと、ソフトな口調。東電に対して怒ってみせた県知事は、一方でこういう専門家を雇っているのだ。県と市のウェブサイトから、教授の講演等の2点を早急に削除す

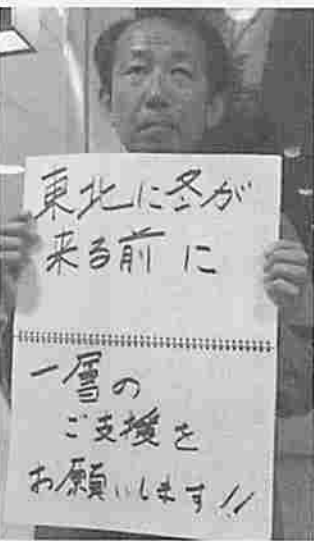
るよう要請。アレを全県でやるんだから、コチラ側の情報拡散は知恵を絞り尽くさなければいけないでしょうね。

問われる新しい世界観

今日も、若い友人家族が東京に引越して行った。子どものことを考えれば正解だ。幾人かの原発仲間が県外に行ってしまった。そして「自分だけが」という罪悪感と必死に闘いながら、それぞれの移動先で果敢にハイロアクションを起している。誇らしい人たちよ。

一方では、50%の選挙民が、この期に及んでも原発に期待感を抱いているとか。ドイツとはエライ違い。避難所での性暴力のこと。お年寄りの絶望。映画「ベイフォワード」を語る若者。または、今日の風向きへの心配。いずれにしても世界は、広島、長崎に続き、FUKUSHIMAの名を教科書に書き込むことになるだろう。問われていくのは、一人ひとりが、世界を被う放射能に負けないような新しい世界観（それは単にエコ生活という意味ではなく）を持って行動できるか、だ。

(くるだ・せつこ、ニガヨモギの会、5月5日記)



ドイツからみる福島原発事故

梶川 ゆう



再び脱原発に舵を切ったドイツ

3月11日から2カ月が過ぎた。ドイツでは日本の原発事故に関する報道は少なくなつたが、福島をきっかけに起きた原発撤退の動きが具体化しつつあり、2021年までには全原発が停止する見込みだ。もちろん大手電力会社はあらゆる手を尽くして時間稼ぎをし、「二酸化炭素排出削減には原発は不可欠」「電力不足でフランスから原発電力を輸入しなければならなくなる」などと利権を守ろうとしている。それでも「資源のない日本では原発が不可欠」と思考停止して、再生可能エネルギーの普及を回避してきた日本と比べると、ここ数年で大きく差がついた。

代替エネルギー政策でソーラーパネル設置に対する補助金制度や、太陽・風力・水力・バイオマスによる電力の有利な買取条件規定が徹底し、1998年の電力市場自由化以来、ドイツにおける再生可能エネルギーの普及は進み、去年で再生可能エネルギーの占める割合は全体の17%となった（日本は2020年までに10%を目標）。10年後には電力の40%、2050年までに80%を再生可能エネルギー

で賄うことを目標としている。なによりも、原発には未来がないと世論が認めている。そしてこの福島の事故で恐怖感さらに募つた隣のフランスには50基以上の原発があるから危険は変わらないが、どこかが率先して原発撤退を始めるしかない。ドイツ人がこれだけ危機感を持ち、それが政治にも反映しているのは、私にはとても「健康的な反応」に映る。日本が余りに「不健康」に見えるからだ。

問われる日本人の意識

福島原発は6基もあり、この先いつまで危険な状態が続くのか見通しがついていない。しかも大地震はいつまたどこで起きるかわからないのに、まだ20数基も原発が稼働している。政府が子ども達の被爆量を年間20ミリシーベルトまで許容し、批判を浴びながらもその決定を覆さずにいる様子を見ても、外国人やフリーの記者を記者会見から締め出す様子を見ても、今の日本は、孤立して戦時体制に突入していったかつての姿と重なって見える。政府は今や、汚染地域から住民を避難もさせずに、国民に無理・我慢を強要する不条理な「お上」であるだけでなく、放射能を「安

全」と暴言して国民を見殺しにする殺人国家になつてしまった。信じられないのは、個人で怒っている人は多いはずなのに、これらの恐ろしい事態がどうして社会的に糾弾されないかだ。9千キロ離れたドイツでさえ原発撤退がすぐに政治課題に上つたのに、原発事故が現実にかけている日本ですぐに原発停止とならないのは、理解しがたい。

日本には過去の汚点・罪などを「水に流す」、都合の悪いことは忘れ、歴史の教科書からも消してしまふ「伝統」があるが、今度は放射能汚染水まで本当に「海に流して」しまった。日本は地震・津波の被害者であることを越え、制御できなくなった怪物の吐き出す放射能による汚染を大気・海・大地・地下水に広げる加害者になつてきているのに、その自覚は一切ない。諸行無常の心情に反して、放射能はほぼ永久的だ。ことに情けないのは、日本が一応「民主主義」の建前をとっていることである。

地震国で、50基以上の原発をつくり、「非核三原則」という隠れ蓑の下で「平和利用」の原発を推進



筆者も参加したドイツ・ネッカーズヴェストハイムでの反原発デモ風景。以下も同じ（筆者提供）



する政党を選挙で選んできたのは国民だ。個人のレベルではどれだけ政府の悪口を言い、東電を罵っても、石原を都知事に再選させ、原発批判の記事を一切載せぬ全国新聞をこぞって買い、電力会社傘下のテレビ放送局を高い視聴率で支えているのは、一般の国民だ。

敗戦後のドイツと日本の民主主義

ジャーナリズムとは恥ずかしくて呼べない日本の報道を目的あたりにして、独裁国家から敗戦後同じように経済成長を果たしたドイツが、なぜこれだけ日本とは異なる民主主義を実現できたか、考えずにはいられない。ここに西欧ロゴスの伝統を継ぐドイツ人の合理的論理展開、批判と反省の精神が反映されているのは確かだ。日本との大きな違いは、言葉による意思表示と意見交換を人間としての基本的な行為だとする認識が備わっていることだろう。日本では「話さなくても分かりあえる」のが人間関係の理想のようだが、西欧では基本的に他者を疑ってかかるのが普通だ。人間が多数集まる場所では、互いに意見交換しなければ、不信感を解き協調しあうことはできないという前提がある。だから日本人に

は想像もつかないほど、個人の関係であれ、ビジネスであれ、政治であれ、議論を尽くすのである。それでも理解しあえない場合は無論あるが、互いの立場は確認できるし、自分の主張の正当性を訴えるため理論武装するので、感情論や曖昧さが排除できる。意見の違いや批判が、相手の人格を否定することにはならず、多種多様な人間のあり方を尊重することが社会の基本だという意識が浸透している。

これはまず教育の問題でもある。大人の日本人がまともに「話ができない」理由をドイツ人に説明するのはほぼ不可能だが、今度こそ、健全な「不信感」こそ日本人に欠けている要素だと思ふに至った。日本人は小さいときから身分・年齢をわきまえ、目立たず右にならうよう躰けられ、「誰か上の人がうまくやってくれる」ことを想定して生活している。大勢に従っていれば自分で意見を表現する必要はないし、責任を担うこともない。しかし、それこそ民主主義を阻む構造だ。自分で自分の利害を主張しなければ誰も自分のために動いてはくれない、という不信感が基本にあつてこそ、民が主体となれる。控えめでしつけない他の大勢であることをやめ、対等な

人間としての対応を受けない屈辱を意識して「馬鹿にするな」と一人ひとりが憤らなければ、この構造は変えられない。

運命と甘受してはいけない

福島を回って東電役員が「申し訳ありません」と謝罪しているが、これはなにか。謝罪ならなにが間違っていたのか解釈を述べ、過ちを招いた理由を分析し、過ちを正す方法を表明すべきだが、ただ頭を下げて見せる彼らの後頭部はいかにも空しいし、人間性を一切遮断した無機質な表情は異様だ。言語による表現とは、対話する相手に向けられ発言される言葉でなくてはならない。彼らの日本語は、密閉の箱の中でアリバイとして流される音質の悪いラジオ放送のようで、生身の人間が相手に理解されようと真摯に発している言葉ではない。

福島の事故発生後、パニックに陥らず「落ち着き払って」見える日本人が理解できないドイツでは、新聞雑誌に日本人のメンタリティーを説明しようとする記事が多々載つたが、その中に日本人がよく言う「しようがない」という言葉の解釈があった。しかし、今「しようがない」では、完全な思考停止だ。思考を停止したら人間ではない。原発事故を運命と認めては絶対いけない。突き詰めて考える能力が今、日本では問われている。

(かじかわ・ゆう、フリー翻訳者、ドイツ在住)



原発に代わる―― 祝島・自然エネルギー100%社会

山戸孝



9割が上関原発に反対

まずなにより、東日本大震災によって亡くなられた方々のご冥福と、被災された方々が平穏な生活を取り戻される日が一日も早く来ることを心からお祈り申し上げます。

今回の震災に対しては、このような状況にもかかわらず現在進行形で目の前で原発建設を強行されようとしている祝島島民の一人としては、やはり福島原発の事故とその影響について注視せざるを得ません。突然奪われた日々の生活。生まれ故郷にいつ帰ることができぬのか、それすらわからない地元住民。放射能に汚染された土と海。とても他人ごとは思えず、日々の報道、また友人や知人からの情報、さらには震災後に西日本に避難して島を訪れられた被災者ご本人らの声を通して現地の状況を知るたびに、心が痛みます。

そして私たち祝島島民が上関原発計画に30年近くわたって反対し続けてきた理由が、このような不幸な形ではつきりと示されてしまったことを残念に思います。

祝島は、山口県上関町という人口3600人弱の町にあり、本州と九州、四国に囲まれた周防灘に浮かぶ人口500人ほどの島です。農業や漁業など一次産業が主産業で、他の離島や中山間地と同じように過疎高齢化も進んでいます。が、「石積みみの練堀」や「平さんの棚田」、そして大分の国東半島にある伊美別宮社と島を結び千年以上続く海を渡る祭り「祝島神舞神事」など多くの伝統文化が今も息づく島です。

そして、目の前に計画された上関原発に、多くの島民が一丸となって30年近くにわたって反対し続けてきた島です。

祝島の目前約3.5km、朝日が昇る方向にある同じ上関町内の「田ノ浦」という場所に原発建設の計画が持ち上がったのが1982年のことでした。以来、町は賛成と反対に2分されました。穏やかで和やかな地域が、友人、親せき、兄弟、家族関係に至るまで賛否の対立でひび割れ、地域の共同体の運営にまで大きな支障が出るほどでした。

町全体では選挙のたびに賛成が6〜7割、

反対が3〜4割という数字が出てきますが、この比率は問題が起きた当初からほとんど変わっていません。その中で祝島は島民の約9割が原発計画に反対し、「上関原発を建てさせない祝島島民の会」という住民団体を作り、原発反対運動をしてきました。

反対の背景と思い

祝島でこれほど多くの人が原発計画に反対した理由としては、いくつかがあります。

島民の中に広島原発で被爆した、または家族が被爆した人がいたこと。

遊漁というお客を乗せて一本釣りで鯛などを釣らせる漁業が盛んで、そのお客さんには広島の人も多く、「上関原発ができたらもう来ない」、「原発ができたら祝島の魚は買いたくない」と言われたこと。

島民の中に、出稼ぎで原発に連れて行かれ、中で働いて被曝した人たちが20人以上いたこと。

そういった事情を背景に、上関に原発計画が持ち上がったから祝島島民は自分たち自身で伊方や島根、敦賀や美浜など原発既立地点へ実際に行き、自分たち自身の目で見てきました。そして原発は決して電力会社言うように安全でも環境も壊さないものでもないことに気づき、自分たちの生活に原発の存在は必要ないという思いを固めました。そうして「自分たちの命や生活を守る」、「次の世代にこのきれいで豊かな海や山を残す」、そういう

た思いで電力会社や行政、国とたたかい続けてきました。

自然と文化で千年続く社会を

そのため祝島の反対運動には「原発を潰しても島が潰れてしまつては意味がない」という考えが根っこにあり、島の生活の向上や特産品の開発など原発に頼らず島を豊かにしていくこと、そして島の伝統文化を意識的に守りつなげていくことも並行して取り組みがされてきました。その甲斐あってか、祝島の反

対運動の輪も少し

ずつ広が

りを見せ

多くの

方々から

様々な側

面からの

応援、支

援を頂けるように

なりました。

してこれから千年以上にわたる祝島の「いのちと暮らし」を守り育て創りあげていくための「祝島自然エネルギー100%プロジェクト」構想を発表しました。まず祝島自らが、

原発ではなく、自然エネルギーで自立(自律)できることを実践的に示しつつ、瀬戸内に最後に残された貴重な自然や、豊かな食を提供してくれる海と山、そして千年続く祝島の文化や伝統こそが、これからの地域社会づくりであることを、多くの方々の御協力を得ながら来たるべき未来の一つの形として、未来の選択肢の一つとして提示できればと考えています。

1%プログラムの立ち上げ

受け皿として的一般社団法人「祝島千年の島づくり基金」も立ち上げ、各方面からの寄附などご支援していただくための「1%」祝島」というプログラムも動き始めました。企業や個人を問わず作品や製品の売上など何かしらの「1%」をプロジェクトに寄付していただき、資金面はもちろんそれに関わる人々のつながりの中から祝島の「100%」を実現させていこうというプログラムです。

プロジェクトではまずは太陽光発電パネルの設置を進めていくと同時に、石油や電気を過剰に消費しないこれまでの島の暮らしの価値に光を当てていくことも視野に入れていきます。小さな島に住む私たち自身が再生可能エネルギーの可能性を新しい技術や論理の実践

を伴いながら体感しつつ、無駄にエネルギーを使わない(使えない)という昔ながらの島の暮らしの持つ良さも自覚的に実践していくようになることも目指しています。

この5月19日には、山口県が中国電力に対して出していた上関原発建設予定地の海の埋め立て許可免許の延長許可を出さないことを検討していることが明らかとなり、日本で最後の新規立地点とも言われる上関原発計画が白紙撤回される可能性も、決して楽観はできませんが現実味を帯びてきました。

福島原発の悲惨な事故を受け、エネルギーシフトという問題がこの日本でもようやく切実な問題として真剣に議論されようとしています。

島の斜面にそびえる棚田の石垣のように、小さな石でも少しずつ積み上げていくことで大きな形を成すことを私たちは知っています。この瀬戸内の小さな島で少しずつ積み上げていくこのプロジェクトに、ぜひ多くの方々にわたしたちとともに取り組んで欲しいと願っています。

(やまと・たかし、上関原発を建てさせない祝島島民の会 事務局)

島民の会ホームページ <http://shinabitionet/>

島民の会blog <http://blog.shinabitionet/>

【祝島自然エネルギー100%プロジェクトHP】
<http://www.iwaini00.jp/>

福島原発情報共同デスクの発足

情報操作への懸念からスタート

福島原発暴走で何が出来るか緊急会議をもつからと天野恵一さんに声をかけられ出かけたのは、確か3月28日であった。おりからこの問題についての政府の大本営発表への不信が高まっていた。政府が信用できないのだから、事故を起こした当事者である東電なぞも信用できないし、その政府・東電の発表をこだまのように増幅させる新聞、テレビなどマスメディアもまた信用できないもの、対象に入っていた。この「信用できない」という気持ちのなかには、「自分たちは情報を操作されているのではないか」という疑問が含まれていた。緊急会議でも同様の意見が出された。

そうしたマスメディア状況の一方で、インターネットの時代を反映して市民というか民衆というか、ただの人やら専門家、何か言いたい人やらが自ら発信したり、あるいは市民メディアとして組織的に発信する動きがここ何年かで急速に進んでいる現実もあった。グループや個人による、文章、映像、音声で発信されるさまざまな情報は、政府・東電の発表のぎまみを鋭くつき、マスメディアの怠慢を批判する内容であふれていた。同時にその

大野 和興



内容には玉石混交、個々ばらばらの感があった。社会への影響力という面でも、マスメディアの圧倒的力には敵わないという現実も存在した。そこで、いま具体的にやれることのひとつとして、こうした市民情報の共同デスクを立ち上げ、既成メディアへの対抗力をつくらないか、と提案した。「福島原発情報共同デスク」と名付けられたこの仕組みは、すでにサイトも立ち上がり(※)、動き出している。

市民メディアを育てる

共同デスクを提案するに当たっては、2008年のG8洞爺湖サミットで形が出来た市民メディア運動を、この際さらに大きな動きにできないかという思いもあった。その意味では、共同デスクの立ち上げは、課題である福島原発問題にとどまらず市民運動のこれからの動きにとっても、それなりの意味を持つていて考えている。

とは思うものの、このごろ「市民による情報」とはどういうものか、で考え込むことも多い。50年近く、メディアの周縁部でうろろろと記者をして生きてきた。70歳を過ぎるとそのメディアからもあまり相手にされず、このごろはもっぱらただ原稿を書いて発表の場を得ている状況なのだが、それでも自分で見聞きしたこと、確認したこと以外は書けないという50年叩き込まれた習性を捨てることが出来ずにいる。

だが、とも思う。この「確認をとる」という、これまでどうも疑わなかった作業自体が権力なのではないか。既成メディアの権力の源泉はそこにあるのではないかと、うろろろに言い方を変えてもよい。

ネットにはデマやうわさ話が満開である。「だからネットは」という人も多いが、実は、だからこそ体制はネットを恐れるのではないか。共同デスク立ち上げの議論のなかで、なんでも発信したらよいものでもない、ある程度の検証は必要ではないか、という話がでて、そうだなということになった。ほくも実はそういう話をした。いま体制は震災に絡むデマ退治という名目でネット言論の規制に入っている。共同デスクの意味をこの観点から改めて検証、論議すべきなのだろうなと、いま思っているところだ。

インターネットの時代に入り、市民メディアが言われ始め、メディア論は盛んになったが、ジャーナリズム論は影をひそめた。メディアとは入れ物で、問題はそこに何を盛り込むかなのだらうと思う。この共同デスクへの関わりを機会に、民衆ジャーナリズム論を考えてみたい。

(おのおの・かずおき、福島原発情報共同デスク編集長)
* <http://2011shinsainfo/>

【資料】 **L'appel de Fukushima** フクシマ・アピール**Mettre la catastrophe sous contrôle citoyen**

これは、福島第1原子力発電所事故に対する、フランスを中心とした識者66名により出された声明です。声明には、環境関係の人、市長、芸術家、科学者、研究者、教員・教授、ヨーロッパ議会の議員、その他ありとあらゆる職業の人が名を連ねています。フランス以外の大学の教授としては、シドニー大学、ブリュッセル自由大学、神戸大学の名も見えます (<http://appeldefukushima.wordpress.com/>)。

フクシマ 惨事を市民のコントロールのもとに

世界市民としてわれわれは、東京電力がフクシマの惨事に対し嘆かわしい対応をしていることを深く憂慮します。

東電は当てのない発電所の再稼働をめざすことで、自社の利益を優先しようとしたつもりなのでしょう。いずれにせよ、東電は秘密裏に行動し、周辺住民・日本国民・世界諸国民と地球の生態系を保全するための手段をごく一部しか使ってきませんでした。東電は核の炎と環境汚染を最大限に阻止する、という予防原則を適用してきませんでした。

いくつかの抗議がおこなわれたにもかかわらず、日本政府は、不透明な行動をとる同社から提供された情報を取次ぐことしかしてきませんでした。いくつかの国の専門家が関与はしましたが、意志決定過程に影響を及ぼすことはできませんでした。現場にいたNGO—とりわけグリーンピースとCRIIRAD（放射能にかんする自立的な研究・情報委員会）—は、住民のより確実な保護とデータの透明化を求めましたが、その要求は、日本市民からの要求と同様、聞き入れられませんでした。

われわれは人類の権利と、環境、とりわけ海洋の権利を優先させるため、東電の行動を緊急に国際的・市民的なコントロールのもとに置くべきだと考えます。

われわれはすべての市民団体・すべての科学者・すべての国家・政府間の諸機関に向け、フクシマの惨事と、それを越え世界中いたるところにひそむ巨大リスクをかかえる諸施設の惨事に対する対応策が、国際的に市民の手中に握られるよう要求して、一斉に起ちあがるよう呼びかけます。

諸国家は原子力産業と共通の利害をあまりに多くもっており、その産業の有効なブレーキとはなりません。続発し隠蔽されつづける事故に直面した現場の技術者が、準拠できる外部の機関もないまま、ひとり困難な局面に立たされる事態はこれ以上あってはなりません。

地球まるごとがわれわれの共通関心事です。地球は企業の論理や強国の論理の上位に立つべき普遍的な善の基盤なのです。地球に人びとが住む可能性を危険にさらすような施設の設置を決定する技術的・専門的な手順に、市民が国際的なレベルで介入しうる時が来ています。

今や国連はフクシマの惨事の制御をやり直し、そのために必要とされる一切の技術的・政治的な協力—NGOもふくめた—を考慮すべきです。そのようにしてはじめて、巨大リスクの防止において、また産業とエネルギーの選択において、科学者と技術者と市民とを結集するための新たな態勢が姿を現わすでありましょう。

(注) Commission de Recherche et d'Information Indépendantes sur la Radioactivité、放射能に関する独立的研究と情報委員会。チェルノブイリ事故の際、フランス政府は、フランスが遠隔地にあるので放射性物質の「雲」からいさかい影響を受けないと述べ、多くの人々が放射性物質に汚染された牛乳、チーズ、野菜などを食べることになった。このことをきっかけとして、1986年に結成されたフランスの非営利組織。

(訳・高橋 武智、本誌編集委員)

6・11 脱原発100万人アクション

福島第1原発震災から3ヵ月目に当たる6月11日、市民によるデモやパレード、講演会・上映会・ライブなど様々な脱原発アクションが全国一斉に企画されています。このアクションは海外にも呼びかけられており、フランスなどで6・11デモの準備が進められています。お住まいの近くの地域で行われるアクションをチェックしてみてください。「市民の意見30の会・東京」も賛同団体に名を連ね、当日都内で行われるデモに会の「旗」を掲げて参加する予定です。当日の行動の詳細は目下調整中ですので、直近の情報はWEBサイト <http://nonukes.jp/wordpress/> をご参照ください。

呼びかけ文と呼びかけの経緯、5月10日現在の賛同団体については下記をご参照ください。賛同する団体および個人は日を追うごとに急速に膨れ上がっており、最新の賛同団体数は本紙面をはるかに超える状況です。ぜひ、ご参加ください。

.....

呼びかけ

6月11日は、福島原発震災から3ヶ月。

今なお放射能の放出は続いています。

私たちは、人や自然を傷つける電気はいりません。

全国各地域の人々とともに、6月11日に脱原発を求める100万人アクションを呼びかけます。

6月11日は、声をあげましょう！

今こそ脱原発へ！！

呼びかけの経緯について

「呼びかけ」は、この間東京でデモなどのアクションを開始した主要なグループの関係者が話し合いを行い発したものです。4月10日の高円寺デモ、4月24日の代々木公園のパレードと芝公園のデモを行った主催関係者、そして3月11日以降に立ち上がった「脱原発・新しいエネルギー政策を実現する会」（略称・eシフト、<http://e-shift.org/>）と「福島事故緊急会議」（略称・緊急会議、<http://2011shinsai.info/node/125>）の関係者です。

賛同一覧
△ 順不同 ↓

脱原発・新しいエネルギー政策を実現する会（eシフト）（東京）

福島原発事故緊急会議（東京）

国際環境NGO FoE Japan（東京）

環境エネルギー政策研究所（ISEP）（東京）

原子力資料情報室（CNIC）（東京）

たんぼ舎（東京）

ふえみん婦人民主クラブ（東京）

フクロウの会（福島老朽原発を考える会）（東京）

大地を守る会（千葉）

NPO法人日本針路研究所（東京）

日本環境法律家連盟（JELF）（東京）

「環境・持続社会」研究センター（JACES）（東京）

インドネシア民主化支援ネットワーク（東京）

環境市民（東京）

特定非営利活動法人APLA（東京）

原発廃炉で未来をひらこう会（東京）

気候ネットワーク（京都）

高木仁三郎市民科学基金（東京）

原水爆禁止日本国民会議（原水禁）（東京）

水源開発問題全国連絡会（水源連）（東京）

グリーンアクション（京都）

みどりの未来（東京）

自然エネルギー推進市民フォーラム（東京）

市民科学研究室（東京）

グリーンピース・ジャパン（東京）

協同センター・労働情報

オルタモンド（東京）

- 反安保実行委員会 (東京)
 ルネッサンス研究所 (東京・関西)
 核とミサイル防衛にNOーキャンペーン (東京)
 関西合同労組、関西合同労組大阪支部 (大阪)
 憲法を生かす会 (東京)
 さよなら原発みのお市民の会 (大阪)
 市民のひろば (大阪)
 環境都市中野をめざす会 (東京)
 グローカル座標塾 (東京)
 国連・憲法問題研究会 (東京)
 つぶせー有事法制・川崎市民の会 (神奈川県)
 バスストップから基地ストップの会 (神奈川県)
 ATTAC Japan (東京)
 エコアクションかながわ (神奈川県)
 NPO法人ADIA／あぶら (東京)
 原発ホーキの会 (北海道)
 さよなら原発★ちがさき (神奈川県)
 憲法9条ー世界へ未来へ連絡会 (東京)
 平和の井戸端会議 (大阪)
 自衛隊を国際災害救助隊にかえようプロジェクト (大阪)
 大阪ピースミュージックフェスティバル制作委員会 (大阪)
 スピチュアル9条の会 (大阪)
 荒川区職員労働組合 (東京)
 フライバシー・アクション (東京)
 あつみの道草あかとはの会 (長野)
 原子力行政を問い直す宗教者の会・信州 (長野)
 たまにはTSUKIでも眺めましょ (東京)
 とめよう原発せがやネットワーク (東京)
 非暴力アクションネット (東京)
- 相模川キャンピングインシンポジウム (神奈川県)
 自然食品の店「あらいくま (東京)
 セッションハウス企画室 (東京)
 西表の自然を愛する会 (沖縄)
 JR西日本労働組合中国地域本部 (広島)
 時を見つめる会 (神奈川県)
 脱原発の日 (福島)
 BEEN Tokyo (東京)
 山西省・明らかにする会 (東京)
 反天皇制運動連絡会 (東京)
 「反改憲」運動通信 (東京)
 長池評議会 (東京)
 JR東海労働組合新幹線地方本部 (東京)
 KDM Lフィルム・ソサイエティ (愛知)
 原発さよなら四国ネットワーク (愛媛)
 市民自治井戸端会議 (東京)
 市民の声・江東 (東京)
 原発震災を考える福山市民の会 (広島)
 たきがしら・希望ネットワーク (神奈川県)
 徳山ダム建設中止を求める会 (岐阜県)
 平和・人権・環境を守る岐阜県市民の声 (岐阜)
 フィリピン情報センター・ナゴヤ (愛知)
 子や孫によりましな世を手渡す会 (埼玉)
 災害時のこころのケアチーム (愛知)
 平和と人権を考える狹山市民の会 (埼玉)
 公共市民塾 (神奈川県)
 福島原発の廃炉を求める有志の会 (東京)
 浜岡原発の運転停止を求める会・ぎふ (岐阜)
 原発なしで暮らしたいー (鹿児島)
 「憲法を守る市民の会」(群馬)
- ノーニユークスアジアフォーラムジャパン (東京)
 長野県有機農業研究会環境部会 (長野)
 劣化ウラン兵器禁止市民ネットワーク (東京)
 国際NGO・水素ネットワーク (東京)
 チェルノブイリ子ども基金 (東京)
 9条改憲阻止の会 (東京)
 ビーブルズ・プラン研究所 (東京)
 日の出の森・支える会運営委員会 (東京)
 不戦へのネットワーク (愛知)
 市民の意見30の会・東京 (東京)
 原発なしで暮らしたい人々 (山口県&広島県)
 ノレの会 (東京)
 新しい川崎をつくる市民の会 (神奈川県)
 原発廃炉で未来をひらこう会 (神奈川県)
 どなべねつと (広島)
 原発震災を考える福山市民の会 (広島)
 脱原発を進める会かながわ (神奈川県)
 NPO法人トージバ (東京)
 女たちの戦争と平和資料館 (WHE) (東京)
 グローバルピースキャンペーン (海外)
 農事組合法人鴨川自然王国 (千葉)
 玄米と旬の野菜 MOMONGA (兵庫)
 Ruth Roots (東京)
 自動車産別連絡会議 (神奈川県)
 Echo Exchanges (ONG) (海外)
 (266団体) 2011年5月10日現在
 個人の賛同は、北海道から沖縄、そして海外まで
 含めて現在916名です。

パレスチナの登場

—中東、その後の展開

高橋 武智

前号で紹介した板垣雄三さんの講演—ぜひ参照してください—を前提として、その後の

中東情勢の展開を検討してみたい。この間、日本では震災のため、海外ニュースは極度に押さえられたが、その間も世界が着実に動きつづけていたことはいうまでもない。以下の情報は、筆者の能力から、インターネット経由で基本的に欧米系ソースから得たことをお断りしておく。

エジプト

エジプトで突破口を開いたイスラム市民革命は、この国にかんするかぎり、ほぼ順調に推移している。大権を握った国軍最高評議会のイニシアティブのもと、ムバラク前大統領夫妻への取り調べは続行中だし、ムバラク色は一掃されつつある。秋には議会選挙と大統領選挙が予定されている。宗教原理主義を標榜するかと思われたムスリム同胞団は、政党を結成、静かに総選挙に参加する意思を表明している。イスラム革命後イランの軍艦がはじめたスエズ運河を通過したことは、エジプト外交の大きな転換を示すものだった。

リビア

この期間に焦点化されたのはリビア問題だった。カダフィ大佐のひきいる政府軍と反体制派のあいだで内戦が始まってからほぼ2カ月だが、決着の見通しはまったくたっていない。

カダフィはナセルの影響下に、1969年クーデターで王制を倒した後、ジャマヒリーヤというイスラム的政治体制を創出したが、長年元首の地位にあると、独裁的にならざるをえないのは世の習いである。他のイスラム諸国の場合と同様に、反体制派が石油の豊富な東部ベンガジに拠って、暫定国民会議を結成した。これに対し、政府軍はアフリカ諸国からの傭兵を多数かかえているといわれるが、武力的には圧倒的な優位に立っている。そこで、英仏政府が呼びかけ—とくにフランスは右国民会議を承認したし、同じ頃アメリカのコートジボールにも、国連軍とともに介入している。この冬、閣僚の何人かが、チュニジアやエジプトの費用もろの旅行に行くという癒着構造が暴露された。サルコ

ジは来年の大統領選挙のため汚名挽回を狙っているのだから、自国民の被害を許すなどという安保理決議をとおして、リビアへの軍事介入を始めた。米国も口先では同調しているが、イラクとアフガン、二つの戦争をかかえて手が回らず、結局NATO軍が空から政府軍を攻撃する形をとっている（地上軍は送っていない）。こうした「人道的介入」がおこなわれたのは、コソボ問題を理由に1999年の、やはりNATO軍によるセルビア爆撃が最初だった。人道的とは美しい言葉だが、実態は「砲艦外交」（ペリーによる日本開国、その後の日本による朝鮮開国がよい例）あるいは大国による「懲罰戦争」にほかならない。

リビアはアフリカで最大の埋蔵量を持つ石油資源国であり、天然ガスも地中海バイブラインを通じてイタリアに送っている。元英首相のブレアがこのほど発表した談話によると、2004年、カダフィがそれまでのテロ関与政策を放棄した時点でトリポリ付近の砂漠でカダフィと会談、国交を回復したとのことである。それと同時に、シェル（英蘭系の石油会社）がリビア沖でガス採掘のため5500万ポンドの契約を結んだことが発表された。「人道介入」と、石油・天然ガスの利権の絡みぐあいに注意してほしい。目下の内戦中には政府側からの石油輸出はおこなわれていない。なお、大震災直後にもかかわらず、3月29日に松本外相は、「英仏米3国の軍事行動を支持する」との談話を発表した。

パレスチナ

もともとナイル市民の決起の動機には、表裏にあらさまには出ていなかったものの、イスラエルとイスラエルを支援する米国への反対という潮流があった。ムバラクが追い落とされたのも、1979年にイスラエルと平和条約を結んだことが大きく響いていた。

事実、ナイルの決起が成功したのち、パレスチナでは、ファタハの支配するヨルダン川西岸地区でも、ハマス支配下のガザでも、パレスチナ勢力の統一と活性化を求める市民の意思表示がつついたという。ここでもエジプト軍は対イスラエル関係を大転換させ、対立していた両組織のあいだをとりもったようである。4月27日ファタハとハマスは今までの行きが

かりを捨て、和解と統一の協定を結んだ。イスラエルに対する第三インティファダへの呼びかけもなされているという。

こうして中東紛争の核心にあるパレスチナ人の権利の問題が、正当にも表舞台に登場したのである。もとよりオバマ大統領が側面支援している(?)という「和平交渉」は、イスラエルがユダヤ人の入植を止めないかたくなな態度をとりつづけているために一歩も進んでいなかった。

交渉への絶望にもかかわらず、この統一達成に力を得て、パレスチナ自治政府の議長アッバスは、東エルサレムをふくむ1967年の国境線内でのパレスチナ国家が国際的に承認されるよう積極的に動いている。まずブラジルの賛成をとりつけ、周辺諸国のボリビア、アルゼンチン、エクアドル、ウルグアイなどが同調する模様で、南米での動きがとくに著しい。

エジプトの外相は、パレスチナの独立宣言を支持するよう、米国に要請したようだ。

5月16日の「ナクバデー」多数のパレスチナ人がイスラエルによって国土から追い出された「大破局」のこと―記念日には、追い出されたパレスチナ人が住みつづけるレバノン、シリアとイスラエルの国

境周辺で激しいデモが展開された。

目下最も有力な予測は、9月に開かれる国連総会（拒否権はない）の席で、パレスチナ国家が承認され、同国家が国連の正式メンバーになることである。5月17日付の「ニューヨークタイムズ」紙上で、アッバス議長は、「あまりにも長く待たされたパレスチナ国家」という論文を発表、13歳のときの彼自身のナクバ体験から筆を起し、パレスチナ国家が十分に国際的に承認される日が間近に迫っていることを力説した。永遠に解決しないかと思われていたパレスチナ問題が、この秋大きく進展するのにわれわれは立ち会えるのだろうか。

まとめ

冬以来の一連の出来事を、欧米では「アラブの春」と呼んでいるが、正しくは「ムスリム（イスラム教徒）の春」ではなからうか。宗教的な面では、欧米が過度に恐れていたようには、イスラム原理主義は前面に出てこなかった。むしろ欧米が今心底恐れているのは、北アフリカからの難民の流入であるようだ。

本命パレスチナの登場により、ムスリム市民革命は、高度な意味で「政治的」な次元に接近しつつあるようだ。

（たかはし・たけとも、本誌編集委員、5月18日記）

メア発言が伝える日米の認識と真実

海老坂 武



埋まらぬ沖繩と「本土」マスコミの温度差

東日本大震災のニュースは他のすべてのニュースを押し流してしまっただかにみえるが、その一つにいわゆる「メア発言」問題がある。読者は覚えておられるだろうか。米国務省日本部長のメアが「沖繩の人はごまかしとゆすりの名人だ」などと発言したことが伝えられ、沖繩からの強い反発を受け、結局は職を解かれた事件である。

私は3月初めからたまたま那覇に滞在していて、3月7日の沖繩タイムスと琉球新報とによって「メア発言」なるものを知った。ともに一面で大きく扱い、発言の要旨を載せ、「差別発言」、「占領者意識丸出し」、「植民地扱い」として沖繩の怒りを紙面にたたきつけている。以後この事件は、11日の朝まで、1面のトップを占め続ける。

ところがいわゆる全国紙を見ると扱いがきわめて小さい。朝日にいたっては半日遅れで共同発の記事を7日の夕刊に小さく載せた。全国紙がこの事件を一面に持って来たのは9日の夕刊から。これは国務次官補キャンベルの来日のためだ。当初彼は「個人的謝罪」を

する予定だった(9日夕刊)。それが「米国を代表して謝罪」することになった(10日朝刊)。そしてメアの更迭という措置が取られる(10日夕刊)。最後に「米大使沖繩で謝罪」(11日朝刊)とくる。

ごく小さな違いを別にすれば朝日も毎日見事に同じ流れの記事を一面に載せ、アメリカ側の動きを中心に伝えている。

報じられない日本政府への怒り

扱いの違い以上に目を引くのは、沖繩の人の日本政府への怒りが全国紙では全く伝えられていないことだ。メア発言に見られる沖繩人への侮辱、差別意識、これにたいする怒りにのみ焦点が合わされている。しかし沖繩の2紙には、日本政府への怒りが強烈にある。

まず官房長官が米側にメア発言の有無を照会しようとしなかったこと、つまり日本政府の「黙認」に対する怒り。ついで、官房長官とルース米国大使との会談が8日になって大使側の要望で、しかも「電話会談」でなされたことへの怒り。そこから「主権国家の体をなしていない」という太田元知事の発言(タイムス3月9日)が出て来る。

どうみても全国紙は沖繩のこうした怒りに鈍感だった。例えば朝日はルース・枝野会談の経緯については1行もなく、この間1回だけメア問題に割かれた社説の結びはこうである。「沖繩や日本への的確な理解を米国側に促すのは政府の責任である」

まことにごもつともな意見というべきか。その同じ日の琉球新報には「なぜ米大使をよびつけぬか」という社説が掲載されているというのに。温度差というにはあまりにもひどいこの態度の落差、暗然とせざるを得ない。

粗野な発言の裏にある真実

以上は沖繩の2紙と全国紙を読み比べて私を感じた落差についてのコメントである。以下はメア発言録で問題とすべき点についての私見である(沖繩の2紙には発言録の全文が載ったことを言い添えておこう)。

私は彼の発言のあれこれを、沖繩に対する彼の無理解、偏見、品性の下劣さといったこととして、「沖繩差別」という言葉で括ってしまうてはならないと考える。それは問題の矮小化になる。私はむしろ彼の発言録の真実と思われる部分にこそ注目したい。以下、発言録の中から3箇所を抜き出す。

(1)「日本政府は沖繩の知事に対して(もしお金が欲しいならサインしろ)と言う必要がある」

なんと、露骨で粗野な言い方であろう。メアの品性が疑われても仕方がない。しかし、

ジブチに1945年以来最初の日本の海外軍事基地

フィリッパ・レイマリ

紅海からインド洋への出口に位置する戦略上重要な小国ジブチは、今年、日本に対し、1945年の敗戦以降はじめてとなる恒久的な海外基地の建設を許した。2009年からソマリア沖で海賊取り締まりに従事している日本の〈自衛隊〉は、外国においてはじめて、それもアフリカの角にすでに根をおろしているアメリカ軍とフランス軍の基地のとなり、耐久性のある施設を利用できるようになる。旧日本帝国が再軍事化の道を歩むうえで、さらなる一段階といえよう。

キャンブ・ルモニエという名の米軍施設—この名称はフランス外人部隊の元兵營の名から来ている—に仮住まいしている150名の日本兵は、まもなく彼らの新基地に移住するところだ。この新基地は米軍およびフランス軍がすでに常駐している空港の脇に建設された。日本兵はジブチ国家が利用に供した面積12ヘクタールの土地を占める。4千万ユーロをかけて建てられた基地施設には、司令・連絡センター、哨戒機P3オリオンの整備用格納庫、パイロットとジブチに寄港する日本海軍艦艇の支援要員のための事務室兼宿舎など

がふくまれる。

理由として挙げられているのは次のようなものだ。ジブチ、イエメン、ソマリア沖のバールマンデブ海峡を毎年通過する船舶は2万隻だが、その10分の1は日の丸を掲げており、あるいは日本が売買する物資を運んでいる。日本列島の輸出額の10分の9は、紅海とスエズ運河を経由するこの海上ルートに依存している。そして事実海賊に襲われた日本籍の船舶は多い。2007年のケミカル・タンカー・ゴルドン・モリ、2008年の石油タンカー高山、2009年のMV Api Finland や、タンカー Socotra Island 号などだ。

兵営都市

世論の風向きに押され、海員組合から、また計2千隻を所有する約100社をたばねる船主協会からの圧力にも押された日本政府は、2009年4月に例外的なすばやきでジブチ周辺海域へ、ヘリコプターを搭載したフリゲート艦2隻と、P3Cオリオン長距離哨戒機2機とを派遣した。その第一の任務は日本の商船団を護衛することだった。

海空軍からなるこの派遣部隊は、アタランタの名で呼ばれるソマリア派遣EU海軍部隊にも、NATO軍にも所属していないので、自前の支援体制が必要だった。オマーン、イエメン、ケニヤを調査したのち、東京はジブチにそのための基地を置くことを選んだ。ジブチは、作戦にとってより中心的な位置を占め、地理的にもアフリカと、湾岸の首長国とつながる中東との継ぎ目にあるだけでなく、何よりも「兵営都市」の伝統をもち、明瞭に親西欧的な停泊地でもあって、他の候補地とくらべて設備や施設も格段に優れているからである。

ジブチ政府との陸上および波止場での施設獲得交渉の結果、2010年7月17日に、日本自衛隊にたいする土地提供の協定が結ばれた。ついで12月には、基地と要員に関する地位協定により、有効期間は12か月だが、自動的に更新されることに決まった。日本側情報源から得たその他の細部を、「インド洋レター」紙2011年1月8日号は次のように報じている。

- ・「領海と海域を含む」ジブチ共和国領土内での移動と交通の自由。
- ・基地活動および軍要員に供される輸入品にたいする関税その他の税の免除。
- ・兵士は制服を着用し、日本ナンバーの軍用車両を操縦し、固有の通信網を利用することができ。
- ・施設の司法的免責特権。家宅搜索・徴発。

差し押さえは認められない。

小切手外交

自衛隊は世界で最も近代化された軍隊の一つに数えられるが、国際的な安全保障体制への参加はこれまで厳しく制限されてきた。1946年憲法―敗戦直後に戦勝国に押しつけられた―がとくに海外派兵を禁じているからである。すでに2003年に、米軍中心の連合軍の枠内で―ただし、復興・人道援助・警察官養成の活動に任務を限定した形で―イラクへの部隊展開を可能にするために、憲法は手直しされるべきであった。2006年に次の段階が訪れた。自衛隊を所管する防衛庁が一人前の省へ昇格したのである。防衛省は省令を出し、独自の予算も使えたり…するようになった。

もとより日本政府は、ジブチへのこの最初の恒久的駐留について口を開こうとしない。平和憲法の侵犯とも見られうるこの事態について議論が巻き起こらないようにするためである。原則的には、現行の法文は自衛隊の海外派遣に矛盾するものではない。「関係国からの要請があれば、自衛隊の活動が、他国軍との集団的枠組みの場合もふくめ、武力の行使にいたらなければ―ただし正当防衛の場合を除く―、自衛隊のプレゼンス

は可能…」とソニア・ルグリエルはその雑誌論文「強国日本の逆説」のなかで述べている。士官学校戦略研究所に勤務するこの研究者は、日本の野心を説明するため考慮に入れるべき要因を次のように挙げてゐる。

- ・日本列島がエネルギーと通商の面で海外に依存していること。
- ・海洋国としての使命感（これが高性能の海軍力をつくりあげた）。
- ・海賊取締りにかかわった国としての経験、とりわけシンガポール・マレーシア・インドネシアの沿岸警備隊の養成（これにより、太平洋とインド洋を結ぶマラッカ海峡での海賊行為は著しく減少した）。

- ・安保管任理事国の議席を手に入れ、これまでの「小切手外交」から一歩踏みだして「国の富を力に変えよう」という日本の野心。

日本はアフリカ大陸全体の開発に関する公的援助のチャンピオンであつて、ジブチにたいしても、民生面での援助を20年間以上続けている。太陽光発電所、農業関連の施設、干害対策、ラジオ・テレビ用スタジアムなどである。日本のジブチへの経済協力は、コンテナ専用ドックのドレラ港における沿岸警備隊専門家養成センター建設にも部分的にあてられている。

戦略的基地の地代

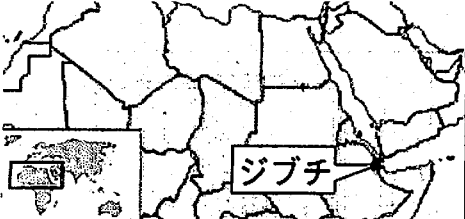
さしあたりジブチは、3番目の恒久的基地の使用料を受け取るうとしてゐる。日本軍新

基地の年間使用料は3千万ドルと定められた―これは、今のところ、アメリカ政府が支払う使用権料と同額だ（が、こちらは2千人の駐留にたいし3千万ドル）。フランス軍は3千万ユーロ（2850人に対し）の賃料を払っている。恒久的基地ではないが、ジブチに施設をもつ他の外国軍―とくにスペインとドイツ―の支払い額は明らかにこれより少ない。戦略基地（空港と港湾）の使用料を唯一の収入源とするこの小国は、今再び世界の注視の的となつてゐる。数週間前にはイラン海軍の司令官である提督の姿さえ目撃された。

フランス側の傾向はむしろ「離脱」といえる。ジブチに半世紀来駐屯しているフランス外人部隊（第13軽旅団）は5月にはアダビに新しくつくられた基地に移動する予定である。フランスとジブチ政府間で結ばれている契約は来年末に期限切れとなる。新契約は兵員数減少を前提にして再交渉されるであろう。パリ・ジブチ間の新防衛協定は、サルコジ大統領のアフリカの角への電撃的訪問の成果として、この1月末にも結ばれるであろう。

訳・白井成雄（しらい・しげお、本学会員）

【編集部注】この記事は、ヘル・モンド・ディプロマティック誌の2011年1月20日付けブログをインターネットからダウンロードしたもので、翻訳と転載の許可を著者レイマリ氏にいただいた。氏は軍事問題を専門とするジャーナリスト。この問題は日本でもあまりとりあげられず、旧宗主国だったフランスの視点が反映されている点でも興味深い。



ジブチ

「リスク管理」から予防原則へ

山浦康明さんを囲んで

—4月15日読者懇談会の報告—

4月15日、「市民の意見」読者懇談会は、「TPPの背景と問題点」(「市民の意見」No.125号)を執筆された山浦康明さん(日本消費者連盟事務局長、明治大学講師)を招いて、ピープルズ・プラン研究所で行ないました。

「消費者運動からみた大震災後の日本社会」をテーマにお願いしましたが、話は福島原発事故の問題点を中心に放射能の食品への影響、政府の責任、エネルギー経済システムの転換の必要性、TPP交渉への影響など多岐にわたりました。

●ラーメンから原発まで

日消連は「ラーメンから原発まで」を掲げ、原発の問題には40年間取り組んできた。福島原発事故はレベル7の状態、今後の状況は予断を許さない。今こそエネルギー政策の転換を求めていくべき。既存の原発を廃炉にしていくためには、市民のネットワークで社会運動を広げていくことが重要。日消連はこれまでいくつもの脱原発運動にかかわってきた。最近では福島原発事故緊急会議、同会議の福島原発事故情報共同デスク、脱原発・新しいエネルギー政策を考える会にも参加している。

地域社会の問題、原発労働者の重層的差別の問題もある。政策的には原子力から持続可能なソフトエネルギーへの転換を図っていくことが必要だ。

政府の復旧構想会議のねらいを見極める必要がある。復興のためのインフラ整備が中心におかれたゼネコンなどが利益を得るままにさせないためには、安全なところに住宅をつくる式の上からのものではなく、地域社会の構想を地域住民が関与して決定することが重要。

原発の被害者救済を徹底させるには、政府族議員、御用学者などの責任追及と、あくまで東京電力の賠償責任を追及し政府の東電救済策にならないようにしなければならない。

●危険な食品の基準緩和

放射能の食品汚染への対応としては、「放射性物質についての食品衛生上の基準値を緩和するな」といいたい。厚生省の諮問を受けた食品安全委員会は3月29日、緊急とりまとめを答申。ヨウ素は年50ミリシーベルトとしたものの、セシウムは5ミリシーベルトを10ミリシーベルトとしてもよいと緩和を認める叙述もあった。日消連と食の安全・監視市民委員会は3月24日、28日に食品安全委員会に対して「基準緩和をするな」との要請書を提出した。体内被曝で長期的影響のである食品の汚染は、特に妊婦、乳幼児に危険が及ぶ可能性が高いことなどを指摘した。(詳しくは「消費者レポート」2011年4月21日号を参照)

TPP交渉では6月の参加表明は先送りさ

れたが油断はできない。輸出用の日本産農産物や工業製品までもが放射能汚染物として一部忌避の対象になりかねない。輸入品ラツシユの可能性はあるが、これをどう考えるか。これからの私たちの社会をどうつくるのか。国内の農林水産業をどう考えるかという点では、食糧の安全保障は国産自給率を向上させることと食の安全を確保することが必要。エネルギー自給率を向上させるにはソフトエネルギーへの転換をすることを消費者運動も考えていかなければならない。

●リスク管理論の破綻

討論で、日本でなぜ54基も原発が稼働することになったのかという問いに対して山浦さんが強調されたのは、原発を推進する側によつて「リスク管理論」が70年代から言われたことにあると。リスク管理論は、予測不能なものは排除してコストの論理で政策的にリスクを低く見積るといふもので、それによると交通事故での死者と放射能で死んだ人の数を比較するというようなことにされてしまう。リスク管理論に対抗していくには、細胞を異常にする放射線量には閾値(いきち)が線引きできないことや、低農薬でも安全性が確立できないものは使わない、災害は避けられないが発生したときにどう被害を最小限にするか、という予防原則を確立するべきだ。また、食品表示にも放射能表示を義務付け

べきだ、との具体的な提案もなされました。吉田和雄(よしだ・かずお、本誌編集委員)

キャンセルという観察点

鈴木一誌

「キャンセル」ということは、日常のなかでよく使われ、「ドタキャン」といった派生語を生みだしている。身近な「キャンセル」の意外な重要さに気づかされたのは、ロボット工学者・国吉康夫さんにインタビュしてあるときだった。国吉さんは、「ロボット技術は、重力や加速度をキャンセルしてきた」と告げる。それまでに実用化されたロボットのほとんどは産業用で、ロボットは、決められた位置でたとえば自動車のボディにリベットを打ちこまなければならなかった。ロボットのアームは、三次元の座標に向かって腕を移動するのだが、運動にともなう遠心力を（ゼロ）にしなければ正確な位置での作業ができない。重力や加速度を

無いものとする、（キャンセル）が必要だった。産業用ロボットの歴史は、キャンセルの精度をいかに上げるかの積み重ねである。

「ところが」と国吉教授は語る。遠心力をキャンセルされたロボットは、人間と同じような動作ができない。例として、寝た状態から起きあがる動きを考えてみよう。わたしたちは、「よっこらしよ」と言い、タメをつくりながら遠心力を利用して起きあがる。介護ロボットが、床に横たわっている人間を持ちあげるとき、ひととの呼吸が合わなければならぬ。人間と共存できるロボットは「よっ

こらしよ」を共有しなければならぬ。「しかし」と国吉さんはつづける。ロボットに「よっこらしよ」と起きあがらせるのは思いのほかむずかしい。こうも言えよう。ロボットを研究することで、何気ない人間の動作がいかに精妙な仕組みなのがわかる。ロボットに「よっこらしよ」を学ばせるのは、遠心力のキャンセルをさらにキャンセルすることである。

「キャンセル」を「無いものとする行為」と広く捉えてみると、生活のすみずみにまでキャンセルは浸透している。たとえば、われ

われの眼球だ。ヒトの目は、対象を見ようとするとき、猛速度で微振動していて、一瞬も動きを止めない。だが、この振動しながらのスクリーンによって、視神経の解像度では見えないはずのない微細な夜空の星までが視認できる。眼球の微震動をキャンセルしつつ、対象の静止を認識するのだ。

持ち慣れない携帯電話をマナーモードにしておくと、全身が振動に過敏になるように、身体の内からこちらでブルブルとした震えを感じてしまう。そんなとき、人間の筋肉や神経はひっきりなしに揺れているのだな、と感

じる。なにかのきっかけで、振動のキャンセルに失敗したとき、みずからの揺れに気づく。余震つづきで、揺れの感覚に付きまとわれていくひとも多いだろう。

ブック・デザインにも、キャンセルは満ちている。ページに正方形を配置するとする。ところが人間の目には、正方形は正方形に見えない。わずかにひしやげた矩形に見えてしまう。重力の影響かもしれない。デザイナーは、（正方形）を読者に見せようとするならば、わずかに縦長の長方形を配置することになる。錯覚のキャンセルだ。同じ大きさの文字でも、明朝体よりもゴシック体のほうが大きく見える。ばあいによって、ゴシック体が大きく見える現象を無いものとしなければならぬ……。

デザインは、クリエイティブな営為だと思われがちだが、じつは視覚現象に対する細かなキャンセル作業の累積である。キャンセルとの視点から世界を見渡してみる。わたしは、危険度の凝視をキャンセルして生きてきた気がする。ならば、これからは、キャンセルをキャンセルしなければならぬ。だがどうすれば、それは可能なのだろうか。

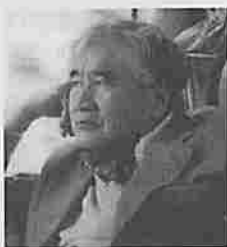
（すずき・ひとし、グラフィック・デザイナー、題字デザインも筆者）

大震災と原発のいっぺん

小田実さんと

高木仁三郎さん

吉川勇一



◆大震災のことなら、まず小田実さんの言葉が頭にうかぶ。「地震そのものは、自然がひき起こした『天災』だ。ただ、その『天災』を

た。全く正しい指摘だったから、冷や汗を流しながらただ頭を下げたまままでいるしかなかった。小田さんの人災への怒りが「市民議員立法」の2年半にわたる闘いと、「被災者生活再建支援法」の可決という、前例のない結果を生んだのだった。

◆吊るしあげられた直後、私が住んでいた保谷市（現在の西東京市）の市議会議員、鈴木美紀さん（現在、本会員）に連絡し、この立法運動について市議会に賛同決議案を出せないかと相談した。小田さん呼び、賛同議員も含めて、市内のあちこちで街頭講演会もやった。そして、保谷市は同案の支持決議を採択した全国で最初の自治体となった。

◆原発についても、小田さんは前著の中で明白に書いています。「発電の例で言うなら、一方に原子力発電、さらには高速増殖炉に至る『経済大国』の科学技術の道があるなら、他方に風力発電、太陽光発電などの再生可能エネルギー源を使って『人間の国』の科学技術の道がある。一方が行きづまり、破局、破滅に至る道なら、他方はいろんな可能性にむかって開かれた道だ」（前書566ページ）

東京駅のコーヒーショップで、まる3時間ほど吊るしあげられ

◆「小田実を読む」が今年3月19日に発行した「りいど みい」2号には、海老坂武さんほか多数の文章が掲載されているが、小田さんの未収録資料「市民立法も、私も、「われわれ」われわれ……」の私から生まれます」も含まれている。（700円、連絡先：山村サロン内、Yamamura@y-salon.com 電話は、0797-362385）

◆原発のことなら、まず高木仁三郎さんのことが頭にうかぶ。核化学専攻の理学博士で、87年に「原子力資料情報室」代表、97年は、もう一つのノーベル賞「ライト・ライブリフツド賞」を受賞した。原子力の危険性を強調してきた人だったが、残念なことに10年半前に62歳で亡くなられた。今回の福島原発の「人災」も高木さんが強く危惧されたことだった。

◆高木さんとの付き合いも長く、述べることが多すぎてここでは紙面がない。せめて、最新新装版で発行された3冊の名著を紹介しておきたい。①高木仁三郎「チェルノブイリ原発事故」1400円、②高木+渡辺美紀子「食卓に上がった放射能」1400円、③高木監修「反原発、出前します——原発事故、影響を考える」2500円、（いずれも+税、七つ森書館）

（よしかわ・ゆういち、本誌編集委員）

◆この震災のあと、「市民の意見30の会・東京」の機関誌が出した読者の関心を問うアンケートの中に、憲法や自衛隊、税金などの項目はあったが、震災被害者への救援は入ってなかった。小田さんの怒りは凄かった。私は、

◆西宮市の自宅で阪神淡路大地震を被災した時から始まった小田さんの怒りは、政府や自治体に対してばかりではなく、ジャーナリストや友人たちにも向かった。



三里塚の風車の前で高木さん。右は前田俊彦さん／筆者撮影

意見広告



9条・25条実現

市民意見広告運動
市民の意見30の会

市民意見広告運動

5月3日・意見広告

「ミサイルより復興支援を」

朝日新聞と福島民報に掲載

全国紙は朝日新聞、地方紙は河北新報（宮城県・岩手県の一部）、福島民報（福島県）に10期意見広告「9条・25条実現」を掲載することが出来ました。皆さんのご協力に感謝いたします。

追い込みの作業中の3月11日には東日本大震災が発生。事務所は新宿区の代々木駅付近の古いマンションの3階。経験したことのない長時間の揺れでしたが被害は本棚の中身が落ちる程度でした。その後、震源が三陸沖

で、これまでに経験したことのない最大級の地震であること、岩手、宮城、福島の想像を超える津波の被害、福島第一原発の放射能もれの重大事故の発生が明らかになりました。

この時点の賛同金は、大よそ1500万円、諸経費を考えると全国紙1紙への掲載も危惧される状況でした。しかし私たちの心配にもかかわらず、大震災の後、途切れることなく賛同金が寄せられ、賛同の締め切りの4月12日には2000万円にまで達しました。

広告紙面の検討は、既に進めてはいましたが大震災と原発事故の発生で、その内容の大幅な変更を迫られました。そこで「9条・25条実現」に加え「ミサイルより復興支援を」と大きく表示した上で、4・8兆円にのぼる軍事予算のすべてを、東日本大震災の復興支援に振り向けることを訴え、更にこの時期に米軍へ1900億円もの「思いやり予算」（米軍基地の光熱費、ゴルフ場を含む施設費等）を支払うのはおかしいと訴えました。

原発についても、「すべての原発の停止・エネルギー政策の見直し」を求め、私たち自身も「原発に頼らない暮らし方を」と訴えました。こうしたメッセージを全国紙だけでなく、

大震災・原発事故で苦しむ地域の地元紙にも掲載すべきとの意見も強くありました。しかし賛同金は目標額の2500万円を大きく下回っていました。新聞各社との掲載費用の交渉・繰越金の一部取り崩し・紙面デザインの仕事で何とか掲載費を捻出、河北新報、福島民報への掲載にこぎつけました。

その結果、「被災地の新聞への掲載は非常識だ」、「被災者を主張の道具にした」、「復興支援を言うなら掲載費を回せ」、「汗水流す自衛隊の方が頼りになる」など反発の意見がメールで寄せられました。ただ、意見広告の事務局から「寄付金200万円」を被災地支援として送った事実全く触れてないのは少々不公平ではないかと思っています。

その一方、意見広告・ミサイルより復興支援に「感激」、「有り難う（神戸市民）」、「虫の息の被災者をないがしろにする政府、行政、東電を許せない（福島県民）」、「殺すなにどれほど重みがあるのか。お願いします、日本から危険なものをなくして下さい（岩手県中学生）」など賛同の手紙・メールも多く寄せられました。

カットは今回の広告紙面です。大変インパクトのある紙面になりました。デザインは、今回も鈴木一誌さんにお願ひしました。

橋本保彦（はしもと・やすひこ、本会事務局）

無名の犠牲者の生と死 「黄色い星の子供たち」

監督・脚本／ローズ・ボッシュ 製作／イラン・ゴルドマン 撮影／ダヴィッド・ウングロ 美術／オリヴィエ・エラウー
出演／メラニー・ロラン ジャン・レノ ユーゴ・ルヴェルテほか 2010年フランス、ドイツ、ハンガリー映画
125分 原題／Butte 2011年夏TOTOシネマズシヤンテ 新宿武蔵野館ほかにて全国順次ロードショー



●7月16日は、フランスでは「ユダヤ人迫害の日」として記念されている。69年前、1942年のこの日、ドイツ占領下のパリでユダヤ人1万2884人（子供4051人を含む）が一斉検挙され、ポーランドの絶滅収容所に送られた。検挙にはフランス警察が全面的に協力した。彼らが一時的に収容された競輪場の名をとってヴェル・デイヴ事件と呼ばれるこの出来事は、戦後フランスにとって罪責感を伴う苦い記憶となった。95年、ジャック・シラク大統領は、「フランス人とフランス国家によって後押しされた占領軍の狂気じみた行為」という表現でフランス国家の責任を認めた。

●3年にわたる調査と数少ない生存者や目撃者の証言に基づいて書かれた脚本は、多くの短い挿話から成り立っている。子供たちを中心にしたユダヤ人家族、彼らを助ける医師や

ち生還者はわずか2千5百人に過ぎなかったという。この重いテーマをとりあげた映像作品は、日本ではルイ・マルの秀作「さよなら子供たち」に次いで2本目になる。もとジャーナリストのローズ・ボッシュは、感傷を排しながら目配りの利いた演出力を駆使して、限界状況におかれた無名の人びとの生と死を後世の歴史に残すという困難な仕事に正面から取り組んだ。神経の弱い人には正視に耐えないような場面もあるが、史実を再現しようとする視線の誠実さによって、見る者に眼をそむけさせない力がある。稀有な作品といえよう。

看護婦らが生き活きと描かれるのに対して、一斉検挙を命じる占領軍司令官やヴィシー政権（占領下フランスの傀儡政府）首脳、あるいは山荘で側近や愛人とくつろぐヒトラーが出てくる場面は、よく似た俳優が巧みに演じているにも拘らず不自然さを免れない。全体を損なうほどではないが、ここは記録映像かスチル写真にした方がよかった。

●占領下のフランスでは、ユダヤ人たちは胸に黄色い星印をつけさせられ、外出や公共施設への出入りも制限された。あからさまに彼らを差別し、密告までしたフランス人も存在したが、その一方で危険を冒して彼らをかくまい、保護したフランス人も少なくなかった。この映画にはその両方のフランス人の姿が冷静に描かれている。ところで、史実によれば当時フランスに在住したユダヤ人の4分の3は何とか生き延びたということを今回初めて知って驚いた。このことがフランス人にとって名誉といえるのかどうかは判断が難しいところだが、記憶に値する数字ではある。

●3月、突然の大震災と原発禍により私たち日本人も多数の同胞・隣人の不幸に直面する事態となった。無論、津波や原発の被害者は当時のユダヤ人のように強制収容所に行かされるわけではないが、肉親も家も奪われ、着の身着のまま放り出された点は共通していると言えないこともない。私たちもまた、非常時の人間性を問われている。

本野義雄（もとの・よしお、本誌編集委員）

『連続講座』一九六〇年代 未来へつづく思想

(吉川勇一 原田正純 最首悟 山口幸夫
高草木光一編集/岩波書店/2625円)

石田 雄

る私に元気を与えてくれる文章
でした。

現在の私にできることは毎月
1回地域の憲法学習会、教会の
九条の会、そして自宅の読書会
ぐらいのことですが、軍隊経験
者が絶滅危惧種となっている今
日、軍隊経験も生かして、安保
武力による抑止を徹底的に問う
本を出したいと、書く体力はないので話した
内容を専門のライターにまとめてもらうとい
う方式を進めているところですので、その意
味でもいろいろ教えられることが多くありま
した。

このたびは吉川さんの『原水爆禁止運動か
らベ平連へ』という論文を収録した『一九六
〇年代 未来へつづく思想』を贈って頂いて
本当にありがとうございます。早速、息も
つかずに読み通しました。これまで長年にわ
たって吉川さんたちの運動の周辺にあり続け、
今年88歳になり、自宅から2kmぐらいいいか活
動範囲がなくなっているながら、それでも「生命
とくらし」を中心とした視点から、何とか平
和・反戦のための行動を続けたいと思ってい

一九六〇年代 未来へつづく思想



第一に、それぞれの時代の「くらし」がみ
ごとに描かれているのが印象的でした。戦後
食糧のない時、特別の意味を持ったマーガ
リン、胸のポケットが右にある裏返された背
広、60年当時のお父さんの貴重な一杯のビー
ルを反戦活動後は「キリンビール断ち」する
話し等々。こうした日常生活へのまなざしこ
そは、くらしに根ざした運動の基礎なのだ
と感じました。このような描写のうまさ、単
に話し方の技術の問題ではなく、運動が生活
する人間によって支えられていることを示す
という点で感服しました。

第二に、このようなまなざしの上に展開さ
れたこれまでの運動組織論の再検討という点
でも、私の図式的理解に反省を迫る具体性に

教えられることが多かったと思います。原水
禁運動当時の「筋幅論争」(編注1)、60年代
の「ベ平連トンネル説」(編注2)などをめぐ
るどろどろした当時の動きは、人間と組織の
関係を具体的に思い起こさせてくれます。

とりわけ重要だと思ったのは、そのような
混沌の中で見出されたベ平連の「共同行動の
新形式」行動目標が一致する限りで協力し、
意見の違いを認め、他人の行動に介入せず、
お互いに中傷しない」についてで、これはベ
平連の貴重な遺産として今日でも参考にすべ
きものだと痛感しました。

最後に、終わりの部分で、砂川での非暴力
直接行動に感動して先住民運動をはじめたデ
ニス・バンクス氏との砂川闘争以後約半世紀
を経た後の出合いの事例は、結論として長期
的展望の必要性を強調された点とともに、読
者に希望と自信を持って活動を続けるための
手がかりを与えるものとして、今後大いに利
用させていただきたいと思えます。

以上、とりあえずの読書感です。くれぐれ
も健康に留意され、いつまでも元気に発言を
続けてください。

(いしだ・たけし、政治学者、本会会員)

(編注1) 筋を通して「反安保」まで踏み込むべきか、
国民参加の幅を重視した平和運動に限定すべきかと
いう、当時の原水禁運動における政治路線論争
(編注2) ベ平連は、いわゆる日和見左翼を新左翼に
鍛え上げるためのトンネルだ、との擲論を込めた中傷





3冊の1968年論

天野 恵一

『もうひとつの全共闘』

闘—芝浦工大全学闘

1968—1972

(芝工大史を語る会／植植書房新社／2500円)

『路上の全共闘』

(三橋俊明著／河出ブックス／1300円)

『1968年文化論』

(四方田犬彦 平沢剛著／毎日新聞社／3150円)

「全共闘」運動と世代に対する断罪のトーンの高さが、その運動の自滅をくぐって成立したマス・ジャーナリズムの常識的評価と大きくマッチすることで、小熊英二の大作がベストセラーになった。おそらく、このことが直接的契機になって、「1968年」もの

というべき書籍がいくつも出版され、あらためてブームがうみだされつつ



(放射能たれ流しの今日まで続く事態のはじまり) という恐るべき状況の現出のなかで、政府・東電のふりまいた原発安全神話を、ここにいたつてもまだ安全、安心をなぞっているだけの、政府の国策学者としての(権威)と電力資本の(お金)で、すっかり脳が腐ってしまっている専門御用学者への激しい非難の声が渦まきだしている。

「専門バカ」あるいは「バカ専門」への攻撃、「御用」の世界に入ることの拒否。考えてみれば、あの時代こそ、もっとも激しく、そういう(知)のあり方が運動的に問われた時代であった。小熊の仕事には、こうしたあの時代の運動が発した、もっとも重要で切実な問いの意味が、まったくつかまえていない。だから、小熊のような(総括)へのアンチとして、「もう一つ」の、あるいはいくつもの(総括)が対置されだす必然性はある。そうした思考において共通していると思われる3冊の本を、ここで紹介しよう。

まず、「もうひとつの全共闘—芝浦工大全学闘1968—1972」から。この「芝工

ある。いま、3月11日の大震災・津波・福島原発爆発

大闘争史を語る会」という、かつて「全学闘」を担った人びとが再編集し、記憶と記録を整理しあうことで成立した本書は、70年代へ向かって自明の自滅を生きた、多くの大学闘争のなかの例外として存在した(もしかしたら、たった一つの例外?)、「小さな日本大学」ともいべき体育会の暴力管理大学のなかで、執拗に持続され、それなりに勝利した個別学園闘争のドキュメントである。

当事者の証言がエピソードに沿って収められている、実にユニークなもの。再編集してこうした記録が作られたという事実自体が、この芝浦工大闘争のもった歴史的な可能性を示しているといえよう。

三橋俊明の「路上の全共闘1968」(河出ブックス、10年)は、日大全共闘の運動を担い続けた(ノン・セクトからML派のメンバー)という軌跡をたどった著者の、「直接自治運動」あるいはバリケード空間の「アジール」としての体験的可能性にこそ着目した魅力的な全共闘体験総括の書である。

四方田犬彦、平沢剛編著の「1968年文化論」(毎日新聞社、10年)は、編者の明示的な小批判に示されるよう



ドキュメント 1590冊
 こんなにも熱くたびり
 こんなにも大きくひろがり
 こんなにも永くつづいた
 全共闘運動があった

と

まず、「もうひとつの全共闘—芝浦工大全学闘1968—1972」から。この「芝工



と

に、闘いのなかに、あるいは闘いを媒介にして生まれた〈文化〉への着目による、小熊の欠落に対する明快なアンチテーゼとして編まれたものである。

収められた13本の論文のなかで、三橋の「直接自治運動」という体験整理に呼応する問題を引っ張り出した若い研究者栗原康の「大学生、機会を壊す——表現するラッターたち」と、高校生「全共闘」世代の平井玄の「スーダラ節を歌う野次馬たち」、当時路上にあふれた「野次馬」たちの可能性をこそ問い直したものの、この2本が心にのこった。さらに、小野沢稔彦の「1968年のドキュメンタリー映画最前線」、あの時代の運動に激しく共振したドキュメンタリー映画〈運動〉の内側を生きた、著者の力のこもったレポートも今日的インパクトのあるものであった。さて、この3冊をならべて共通する欠落が気になった。「文化論」の限定のあるものとはともかく、党派活動家を中心につくられた芝工大全学闘のほうにも、ML派というもつとも単純な政治(軍事)革命主義セクトに落ちついた三橋の本にも、政治闘争への総括がまったく欠落しているのだ。あの、もつとも激しく闘われた(ベトナム)反戦・安保・沖縄闘争抜きで、あの時代は語りようもあるまいに。その体験は、今の私たちの運動のなかにどのように生きていくのか。

(あまの・やすかず、本誌編集委員)

読者の声

◆私たちが政治家を育てる

京都府京都市 山本祥子

せっかくの政権交代も、見るも無残な様相です。地方から国まで政治家を育ててこなかったつけを痛感しております。

◆大阪も東京も同じ状況

大阪府大阪市 仲川真紀

東京ではこちらではわからないほど、余震などで大変だと思えますが、あまり余震が続かないよう祈ります。但し、トンデモナイ知事が幅をきかせているのは同じですね。

◆ヒロシマ・ナガサキ・フクシマ

東京都多摩市 山本日出夫

ヒロシマ・ナガサキ・フクシマ。不名誉なフレーズはもうこれで、きっちり終わりにしよう。

◆災害には軍隊はいらない

愛知県知多市 坂野一三

東日本大震災は私に虚無感を与えてくれました。だから自衛隊も米軍もそして基地も必要なのだ。という大波にながされそうです。必要なのは銃や戦車で武装した軍隊でなく、シャベル、ブルドーザー等を装備した国土保全隊です。

◆生活の仕方を考え直すとき

神奈川県座間市 丸田康子

戦中、戦後派の私たち夫婦は偏屈なのだと思っていました。自動販売機、イルミネーション、電気店などの過剰な点けつばなしを見るにつけ二人で腹を立てていました。だが社会全体で今までの生活の仕方を考え直す必要があります。

◆被災された会員方が心配です

北海道上川郡 加藤美智子

今回の大震災で被災された会員の方もおられるのでは、と心配しています。原発は人災です。私もすべての原発停止を求めます。

4・30 ツイッターの呼びかけによる渋谷・脱原発デモ/写真:野澤信一



◆原発事故のあと母と暮らしている

東京都武蔵野市 山田哲哉
 義母が福島県川俣町という福島原発から34kmの所に暮らしていました。今、武蔵野の我が家にいます。こうなると判っていたのに何もしなかった自分が情けない。

◆すべての原発の廃止を

東京都小平市 蓮沼忠利
 常に危険な原発はすべて内外問わず廃止してほしい。

◆地元での運動へ

佐賀県鳥栖市 高嶋敦子
 高齢で働きはできないので献金だけでもと続けてまいりましたが、当地にも9条の会や原発の問題があります。残された人生はそちらの応援をしたいと思っています。

◆世界の貧困をなくすために

東京都杉並区 小西純寛
 フェアトレードの店を開いて1年になりました。世界から貧困をなくす努力は排外主義ナショナリズムを抑える一つの手段だになると思います。それは上下の関係でなく人々がどこまでも横につ

ながることで可能となるのですから。

◆非人間的なロボット戦争

岡山県備前市 北川 寛
 ロボット戦争時代がやってきました。宇宙の軍事化、ブレデターはアメリカが主、日本が協力。その非人間性を広くアピールすべきです。

◆テレビ無しの生活も悪くない

京都府京都市 大井哲郎
 地デジキャンペーンは少しうるさすぎないか。人それぞれ都合があるし、アナログ放送終了を機会にしばらくテレビ無しの生活も悪くない。地デジ対応を必ず今年の7月に間に合わせなければならぬとは思われないが、いかがだろうか。

◆地元で毎年憲法の集いを開いています

静岡県藤枝市 塚本清一
 充実した誌面は読みごたえがあります。毎年、5月3日と11月3日に東京から識者を招き「憲法に学ぶ集い」を開いています。

◆関西弁が良い

山口県大島郡 小方容子
 事務局の皆様、いつもお忙しいのに御苦労さまでございます。「市民の意見」125号の2ページサヨリの記事に吹き出してしま

ました。関西弁がいいですね。

◆草の根の意見の主張を

茨城県取手市 松浦和子
 いつもながら薄い冊子なのに内容は盛りだくさん。121号読みました。参院選後のもやもやが武藤一羊さんの意見で整理されました。なるほどです。草の根の一人一人が意見を主張すること、大切です。

◆九条実現を

長野県東御市 吉沢好樹
 九条を実現したとき、この国は初めて真の独立を果たす。

◆情報にふりまわされたくない

兵庫県姫路市 岡本昭子
 いつも機関紙ありがとうございます。たくさん情報に振り回されながら見失ってはならないことを感じさせてくれます。

◆塩尻でがんばります

長野県塩尻市 川上賢二
 おかしなことが多すぎます。今にはじまつたわけではないでしょうが、こちらの地、塩尻でも頑張っています。

◆ともに力をあわせよう

東京都江戸川区 宮岸民子

いつもありがとうございます。幼稚園の全員で、ともに頑張りたいと思います。力を合わせましょう。握手!!

◆参考にしてます

神奈川県横浜市 田中 園
活動の参考はいつも「市民の意見」です。

◆自分に元気をつける

東京都豊島区 磯谷佳世子
自分自身に元気をつけ、シャキツとするために暮らしの無駄をはぶき、このカンパをします。「ノーウォォーも言えぬ幼ら撃ちし兵心病むともノーウォォーは言え」

◆人災は予知されていた

大阪府箕面市 佐々木良子
つい先日、満91歳になりました。東北関東大震災のことを一刻も思わずにはいられない最中でした。その中で福島原発の事故は、未曾有^{みぞう}ではありません。世界の唯一原爆を体験し、また、これは予知されていた。人災^{ひとわざ}そのものです。亡き高木仁三郎さんを思うこと切です。

◆貧者の一燈

東京都世田谷区 森井 眞
貧者の一燈、お許しください。「市民の意見」、共感して読みました。

◆「天井棧敷」そして「海の沈黙」
フランスの抵抗精神への畏敬

東京都杉並区 高野ゆう子

高校の授業をぬけだし、私が「天井棧敷の人々」を見たのは、そう、50年のはじめだった。既に「天然色」の大作もあったが、無彩色のこの映像は間違いなく透明にして豪華だった。進学して社研「社会学研究会」にはいった。帰途、先輩と映画の話になった。「なんといつても『天井・・』。」「えっ。どうして」。あのころは反戦・非戦の作品が多かった。「禁じられた遊び」とか。工学部の彼は、そういう作品の一つが出てくると期待したのだろう。ガランスと、それを追い続けるバチストの優柔。えらく冗長で、退廃的な。最後の最後。あんなに長い回り道のあとでバチストが「恋なんて簡単だね」といい……。しかしバチストの妻が現れて「夫婦とは長い人生の毎日をかさねていくものなのだ」という。

一言もなく、^{まぶさ}瞋^{まぶさ}をあげて、決闘を制止するため馬車に乗るガランス。追うバチスト。後年、朝日新聞の日曜版にこの作品がとりあげられ、監督カルネが「アルレットティはナチ軍人の愛人でした」と語ったと。この経過から彼女は戦後バリの人々の反感を買ったという話もあった。私はアルレットティ主演の「悪魔が夜来る」も観ている。悪魔のために寄り

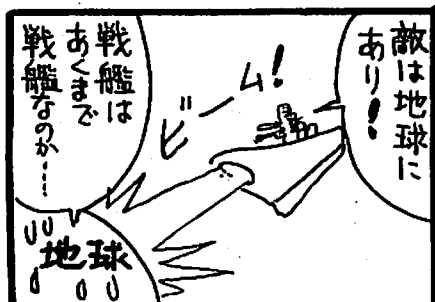
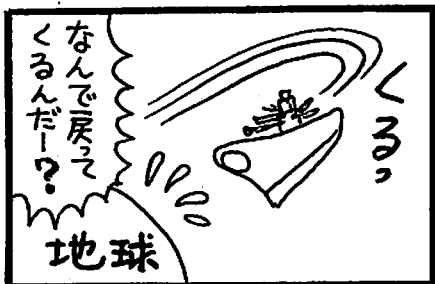
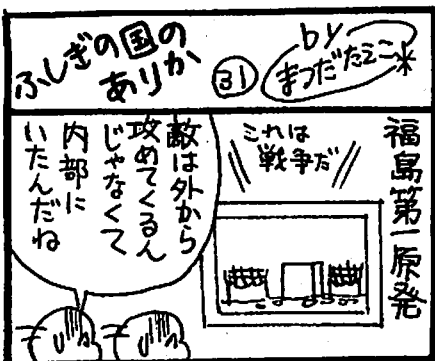
添ったまま石にされた二人。悪魔が怒って鞭打つてもどうしても止まらなかつた心臓の音。昨年の収穫は「海の沈黙」だった。小品ながらこれも秀作である。

◆被災地にて

宮城県仙台市 瀬川 満夫

吉川勇一様、宮城、福島へのお心づかい、ありがとうございます。私たち一家も10日ぐらいの避難所暮らしですが、同じ仙台でも若林区と青葉区では天と地の差があり、昨日、電車とバスで石巻に入り、言葉を失う光景に触れ、千年に一度の世界史に接した思いで「日米安保」を「日米市民生活安全保障協会」と180度の価値の転換を求められているような気がします。私の焼印を鑄造する東松島航空自衛隊基地に隣接する「石巻工業団地」の資材道具が全て流出しましたが、国民の命を、ジェット機もミサイルもイージス艦も航空自衛隊も海上自衛隊も全く守れないことを松島基地が立証したことになり、航空、海上自衛隊と沖縄、原発に注いだ巨費を三陸と仙台湾に廻せば、東北は新たな国づくりが可能だと思います。(九条条文の焼印を刻した「九条せんべい」責任者)

「読者のおたより」の多くは、会費納入の際の郵便振替票に書かれているメッセージを使わせていただいています。掲載について匿名をご希望の方は、その旨明記していただけると幸いです。



Information

【東京】☆開催中～7月27日(日)「かすかな光を求めて一療養所の中の盲人たち」9時30分～16時30分(入館は16時まで) 休館日:月曜日、祝日の翌日、場所:国立ハンセン病資料館(西武池袋線「清瀬」駅南口、西武新宿線「久米川」駅南口「所沢」駅東口、でバス「ハンセン病資料館」下車、主催:国立ハンセン病資料館、電話042-396-2909

☆上映中～6月18日まで ドキュメント映画「無言館」 入場料:一般1800円、学生1500円、小中・シニア1000円 場所:新宿武蔵野館(JR「新宿」駅中央東口)

☆6月4日(土)14時から「とどけメッセージ キッチン窓からガレキの戦場から一いま、語り書き写し歌い舞うとき」第一部「表現者はリレーする」宇井真紀子ほか、第二部「映画とトークの夕べ」一映画「カンタ!ティモール」、トーク、広田奈津子 場所:東京ウイメンズプラザ(JR山手線「渋谷」駅徒歩12分、地下鉄銀座線・半蔵門線・千代田線「表参道」駅徒歩7分)、入場料第一・二部:前売1500円、当日2000円、一部または二部:前売1000円、*当日2000円、学生・障害者は200円引き 主催:戦争への道は歩かない! 声をあげよう女の会、問い合わせ:090-9964-2616(和田)

☆6月5日(日)12時から「被災者を全力で支援しよう!すべての原発をとめよう!6・5怒りの大集会」場所:練馬文化センター大ホール(西武池袋線・西武有楽町線・都営地下鉄大江戸線「練馬」駅北口、徒歩1分) 主催:6・5集会実行委員会、連絡先:戦争を許さない市民の会、電話03-3868-6630

☆6月6日(月)18時30分から「毎月第一月曜日夜の防衛省抗議行動」 毎回、辺野古現地の生の声を電話中継。自由に参加できます。 場所:防衛省正門前(JR/地下鉄「市ヶ谷」駅、「四谷」駅、徒歩7分) 連絡先:辺野古への基地建設を許さない実行委員会(*沖縄・一坪反戦地主会関東ブロック電話090-3910-4140 *市民のひろばFAX03-5275-5989)

☆6月11日(土)6・11脱原発100万人アクション(海外を含む全国規模で一斉行動を予定。詳しくは<http://nonukes.jp/wordpress/>を参照)

【神奈川県】☆開催中～6月14日(火)まで「無言館」所蔵作品による戦没画学生「祈りの絵」展 11時～20時 場所:横浜赤レンガ倉庫(みなとみらい線「馬車道駅」または「日本大通り駅」より徒歩約6分) 入場料:当日1,000円(小中学生500円) 前売900円(小中学生400円) 共催:(財)戦没画学生慰霊美術館「無言館」、横浜赤レンガ倉庫1号館 問合せ:戦没画学生慰霊美術館「無

言館」事務局0268-37-1650

【埼玉県】☆緊急開催中～6月11日まで「チェルノブイリから見えるもの一貝原浩「風しもの村チェルノブイリ・スケッチ」を中心に、本橋成一のチェルノブイリ写真、広河隆一の福島原発事故写真など展示、会期中に本橋成一トーク開催予定(日時未定、丸木美術館に問い合わせ) 場所:原爆の図丸木美術館(東武東上線「東松山」駅・「森林公園」駅タクシーで12分、「東松山」駅東口、市内循環バス「唐木コース」浄室院入口下車、徒歩5分、入場料:大人900円、中高生・18歳未満600円、小学生400円 主催:原爆の図丸木美術館、電話0493-22-3266 休館日:毎週月曜日

【兵庫県】☆7月2日(土)14時から第28回小田実をよむ「アメリカ」話:山村雅治、参加費:1000円、場所:山村サロン(JR「芦屋」駅前ラポルテ3階)、問い合わせ:山村サロン電話0797-38-2585

☆7月23日(土)14時から第29回小田実をよむ「世直しの倫理と論理(上下)」第一部講演「小田実の市民概念(仮題)」話:高草木光一、第二部「小田実を読む」話:玄順恵、参加費:1000円、場所:山村サロン(JR「芦屋」駅前ラポルテ3階)、問い合わせ:山村サロン電話0797-38-2585

【京都府】☆6月18日～3週間 ドキュメント映画「無言館」上映 入場料:一般1800円、学生1300円、高校生以下・シニア・障害者1000円 場所:京都シネマ(阪急「烏丸」駅)

事務局だより

高橋 武智

■毎号マンガ「ふしぎの国のありか」を描いてくださるまつだたえさんから、3月25日付けで事務局に次のようなお手紙をいただきました。

「：私たちが神戸市民も、阪神淡路大震災を経験しましたが、あの時は津波も原発事故もなかったし、今回の東北関東大震災とは比較にならない」と皆おののいています。私も連日の恐ろしいニュースに次々とセカンド・トラウマを背負い続け、一週間以上、何も手につきませんでした。：」

■収束にほど遠い事故の報道を追うにつけ、責任という問題にぶつかります。原発を推進した側の責任と、それを結果的に容認してきた側のそれです。またこれは、今までは被爆国を売り物にしてきた日本と、大気中と海洋に放射能をまき散らし、人類と環境に対する加害国となった日本の関係とも二重写しになります。

■この機会に、原爆と原発に共通する悲劇と責任とを見事にとらえた小田実さんの『HIROSHIMA』（講談社文芸文庫）を一読されたらいかがでしょうか。コンゴでのウラン採掘から米本土ニューメキシコ州での開発・実験へ、さらには太平洋をわたって原爆が落とされるまでの日米両社会の幾重もの差別の

歴史が綿密に跡づけられ、投下を命令した米大統領と、その戦争を起こした天皇の二人が絶対的加害者として浮びあがります。

■投下直後の広島の様子は短く圧縮して記述されるだけで、最終章は、「電気になる」鉱石の発掘に従事したため、ガンに侵されたアメリカ先住民と、核実験直後にグラウンド・ゼロめがけて突撃させられたため、やはりガンにかかった「アトミック・ソルジャー」が共に死を迎える黙示録的なシーンで終わる大きな叙事詩です。

この作品により小田さんは、アジア・アフリカ世界のノーベル文学賞といわれるロータス賞を1986年に受賞しました。

■憲法記念日掲載予定の締切り間際に振り込まれた意見広告賛同金の処理、鈴木一誌さんによるデザイン確定と、その細かな校正作業、さらには5月3～5日の読者からの電話

への対応など、事務局はあわただしい日々を過ごしました。今年の傾向として、「殺すなバッジ」と「9条実現バッジ」の注文が増えているようですが、詳しくは橋本さんの報告をご覧ください。

■意見広告の中で報告したとおり、東日本大震災の被災者への義援金として、広告を掲載した二団体から200万円を「国境なき医師団日本」へ寄付しました。うち、市民の意見30の会の負担分150万円は、F/I基金（亡くなった会員、藤本義一さんからの寄付を原資にしたもの）から支出したことをご報告します。

■前号で予告した無言館ツアーはお察しの事情でしばらく延期することになりましたが、首都圏の読者のためまるであつらえたように、100周年を迎えた横浜赤レンガ倉庫1号館と無言館の共催で、「無言館」所蔵作品による戦没画学生「祈りの絵」展が5月26日から6月14日まで同倉庫で開かれます。お時間のある方はぜひお出かけください。（Information 欄参照）

■新規入会者数—会員とは定期購読される読者のことです—は9名、退会者（逝去された方をふくむ）は6名、4月末現在の会員数は2007名です。ありがとうございます。

（たかはし・たけとも、本誌編集委員）



「殺すな」反戦バッジ（大1個2500円、小は2300円）。九条実現バッジは大1個3000円、小が2500円（いずれも送料別）。詳しくは事務局（電話FAX 03-3423-0185 E-Mail ken30@mwbiglobe.net.jp）にお問合せください。

編集後記

◆5月3日の新聞に掲載された「市民意見広告運動」広報ツールの一つとして「ツイッター」を立ち上げ、「つぶやき」担当（つぶ担）の一人として取りとめもないことを携帯電話でぶつぶつとつぶやいてきましたが、この2ヵ月間あまりを振り返ると、寝ても覚めても話題はやはり原発問題でした。

◆最大・最悪のデジャブーのような原発事故が起こり、今もって終息の見通しも立たないまま、被災地や自分が住む関東一円はもちろん、世界の大地と土壌、海水が深刻な放射能汚染を受けています。しかし正直なところ、事故直後の緊張感に比べると、日常生活を続ける中で、何となく「馴れ」に犯されつつあることに戸惑いも感じます。

◆広瀬隆さんの講演を伺って、「頑張らなく

てはいけないのは、被災者ではない。今こそわれわれが頑張らなくてはいけない」との言葉が、心底身に沁みました。脱原発デモが全国に広がり、若い人たちが立ち上がっています。今、市民が行動を起さなくて、何時起すのか。6・11アクションに結集しましょう！（野澤信二）

●訃報 会員のご逝去の報をご遺族からいただきました。

井上 務さん（千葉県印旛郡）
佐藤孝司さん（愛媛県松山市）

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

●編集委員 天野恵一、阿部めぐみ、有馬保彦（次号担当）、杉内蘭子、高橋武智、高岡甫雅、西田和子、野澤信一（本号担当）、道場親信、本野義雄、諸橋泰樹、吉川勇一、吉田和雄

会計報告

東日本大震災と福島第一原発の事故は、私たちの暮らしにも大きな変化をもたらしている

市民の意見 30の会・東京 2011年3月～4月会計

1. 収入	
一般会費	260,000
協力会費	100,000
敬老会費	271,700
障害者会費	13,500
(会費小計)	645,200
カンパ	195,420
ニュース販売	10,000
グッズ等販売	3,200
銀行利息(*1)	569
集会入場料(*2)	3,500
預り金	327,500
預り金精算	176,516
収入計	1,361,905
2. 支出	
印刷費	234,423
発送費	166,255
通信費	19,923
消耗品費	22,241
編集費(*3)	46,975
会場費	2,000
交通費(*4)	72,230
事務所費(*5)	165,000
光熱費	9,173
手数料	61,655
諸会費(*6)	1,500,000
雑費	1,732
立替金	254,505
立替金精算	213,500
支出計	2,769,612
3. 収支	(1,407,707)
前期からの繰越	8,978,668
次期への繰越	7,570,961
4. 残高の内訳	
会基本会計	5,867,225
条約基金	176,715
F/I基金	1,165,820
預り金	361,201
計	7,570,961

(単位：円)

注(*1) ゆうちょ銀行利息。(*2) 読者懇談会500×7名。(*3) 読者懇談会講師謝礼、会場使用料、執筆者へのお礼図書券、資料用図書購入費等。(*4) 事務所スタッフ交通費2～4月分他。(*5) 家賃4.5月分および更新料1か月分。(*6) 東日本大震災被災者支援のため「国境なき医師団日本」へ寄付(F/I基金より支出)。

この「市民の意見」が、私たちにとって大切なものが何かを考える時、お役に立ちますよう願ってやみません。(上口)

ます。食料品や日用品が不足したことで、日ごろ忘れていた産地や生産者のことを思い起こさせ、放射能漏れによる海や大地の汚染健康被害への不安は、人が生きるうえで本当に大切なものは何かということを考える機会となりました。今こそ大切なものを守るために必要なものでないものを取捨選択し、賢い消費者として生きたいものです。

さて、今期は特別の支出として被災地への支援金150万円のほか事務所の更新料やスタッフ交通費を3ヶ月分計上したため前期からの繰越金が大幅に減少しました。

しかし、会費やカンパ、ニュース販売などの収入が前期より少し増えたことと、義援金を「F/I基金」から支出したことで、実際の会基本会計の赤字は2万円程です。